

谷中得應軒蔵『筆譜』について

中尾 泰斗

Translating and Translation the Booklet “Hippu” by Yanaka Tokuoken

NAKAO Taito

地域学論集（鳥取大学地域学部紀要） 第19巻 第3号 抜刷

REGIONAL STUDIES (TOTTORI UNIVERSITY JOURNAL OF THE FACULTY OF REGIONAL SCIENCES) Vol. 19 / No. 3

令和5年3月27日発行 March 27, 2023

# 谷中得應軒蔵『筆譜』について

中尾泰斗\*

Translating and Translation the Booklet "Hippu" by Yanaka Tokuoken

NAKAO Taito\*

キーワード：日本画, 絵筆, 筆譜

Key Words: Japanese painting, Paintbrush, Booklet "Hippu"

## I. はじめに

本稿は、谷中得應軒が所蔵する宮内大助（以下、大助と記す。）筆『筆譜』の翻訳と記載情報の整理によって、日本画における絵筆研究に関する資料作成を目的としている。

我が国の絵画は、中国絵画の影響を受け発展してきた。このことから書画一致や文房四宝、骨法用筆といった考え方が根付き、筆が重要視されてきた。また、絵画思想の観点のみならず、宮廻・荒井・鴈野（2014）や林・箱崎（1994）といった制作領域からも指摘されるように、日本画において絵筆は紙や絹等の基底材に画家の考えや行為を表すために欠かせない道具である。

しかし、絵筆は絵を描く用具・用材の中で消耗品の性質を備えた常備品（鹽田, 1942）と捉えられるように、画家にとって身近である一方で使い終われば廃棄または筆供養される。よって、物故作家の使用品は現存しづらい。たとえ遺品を発見できても、湿潤時の穂先や獣毛の種類を確認するには水や破壊検査が必要となるため保存の観点から問題がある。これらを一因に、神田（1975）や木村（1975）、尾崎（2013）が指摘するように筆は研究の進展が芳しくない。

ところで、日本画制作では画家が望む表現や技法、

用途に合わせて数種の筆を使い分ける。この、画家が多種の筆を選択できる環境は筆職人による絵筆の開発が前提にあることはいままでのない。本邦の製筆史は木村（1975）に詳しいため割愛するが、日本画における絵筆に関しては宮内得應（以下、得應と記す）をはじめとした宮内家が重要な位置を占める。特に、宮内市松（以下、市松と記す）が取り組んだ長流筆や削用筆、則妙筆は絵筆開発の象徴的な事例といえる。これらの筆は現代では広く一般に用いられているが、そもそも市松が川合玉堂や橋本雅邦らと交流する中で企画し、制作における問題点の解消や作家の個性を活かせる獣毛の種類と穂先の形状を提案することで誕生した。（これらの一連は尾崎（2013）に詳しい。）このほか、宮内家は市松の他に三男の大助が谷中得應軒、六男が宮内不朽堂を興し絵筆の製造や販売に関りながら現在に至る。

以上のように、宮内家には明治期から蓄積した製筆の知識と技術が現代まで受け継がれている。しかし、これらに関連する研究や資料は前述した尾崎（2013）の成果を除くと管見の限り見られない。このような状況の中、本稿で対象とする『筆譜』は大助が記した冊子として谷中得應軒に所蔵されているながらもこれまで全容が明らかにされてこなかった。

---

\*鳥取大学大学地域学部人間形成コース

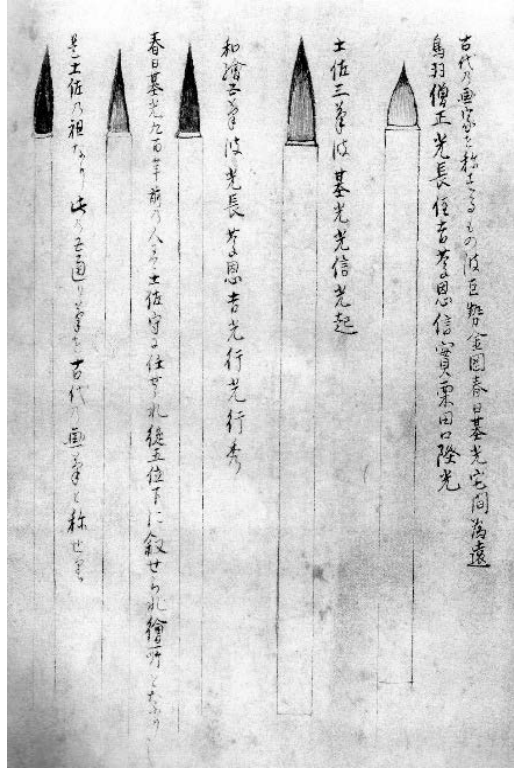
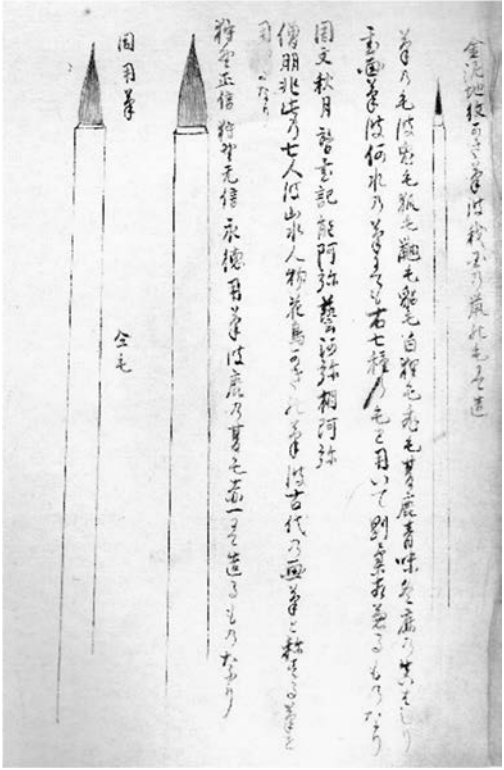
## II. 『筆譜』の構成と性格

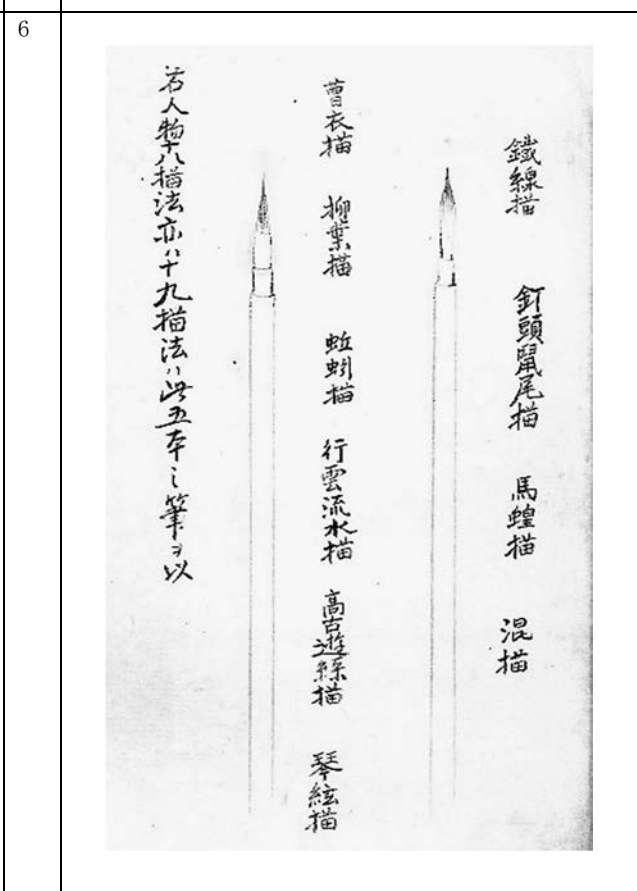
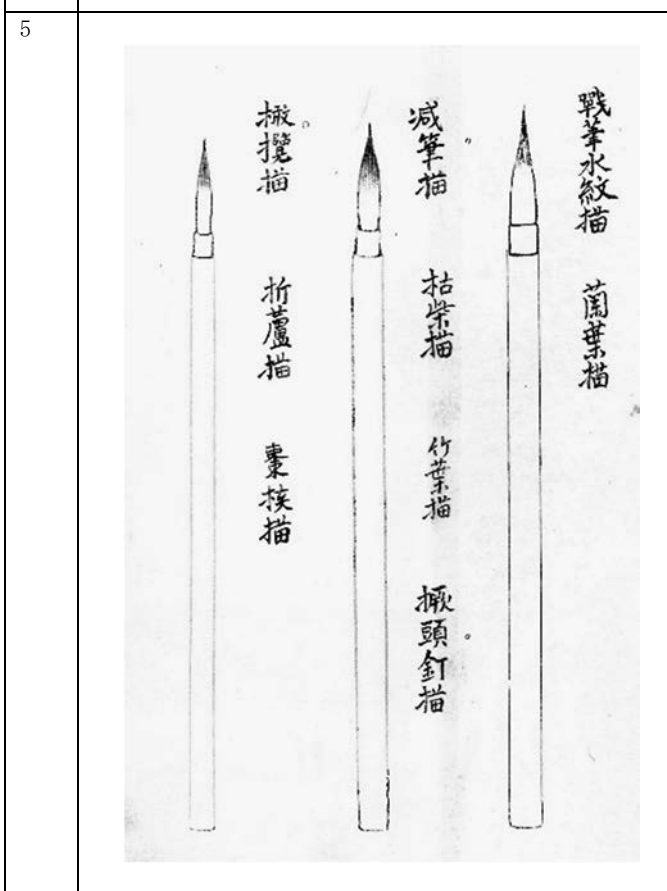
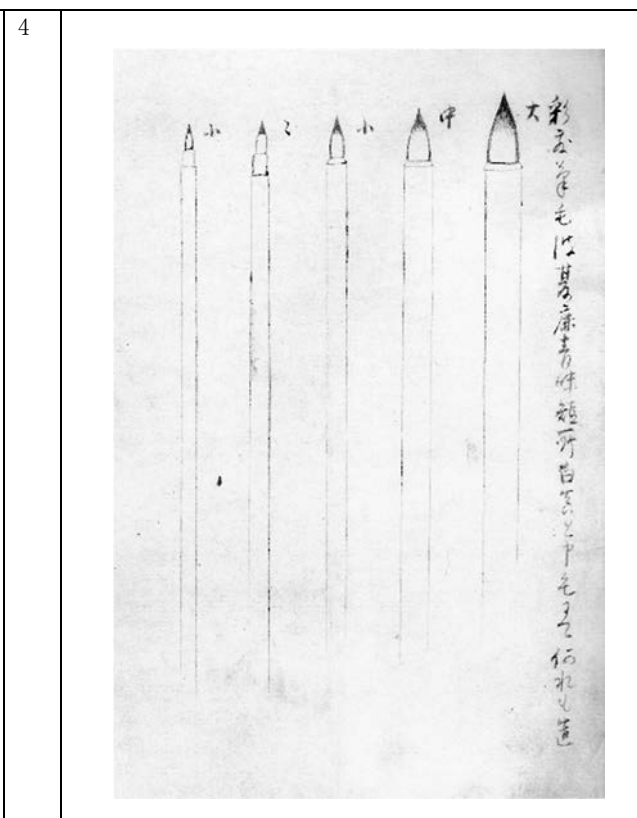
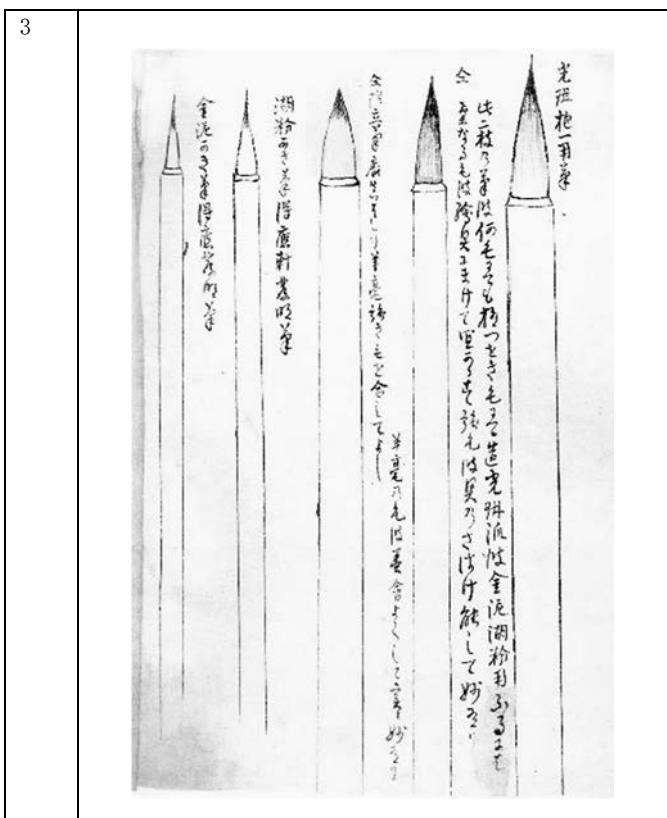
『筆譜』は、右開き各 18 頁と 43 頁の 2 冊で構成されている（資料 1）。図や文字の記載は和紙に墨を主とし、部分的に彩色された図もある。

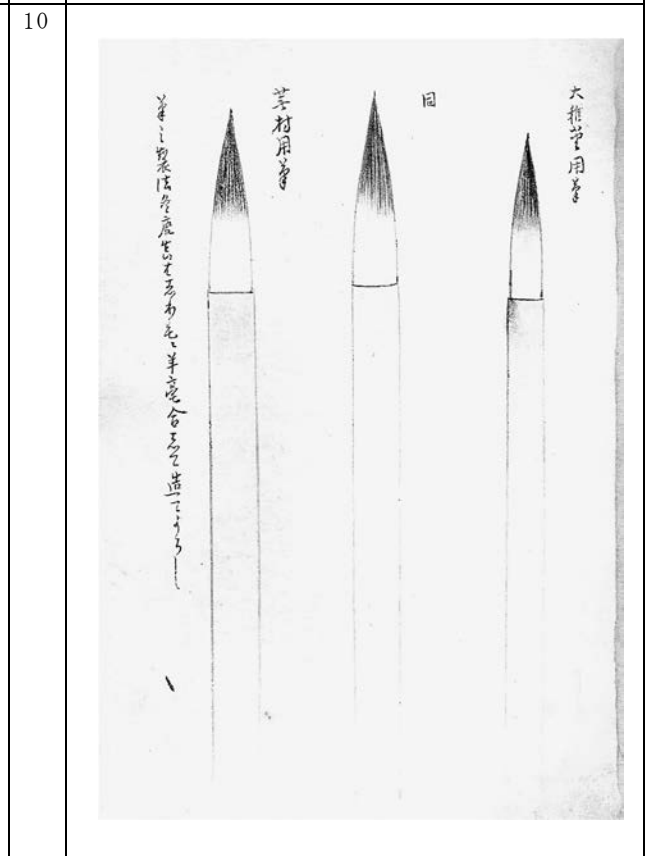
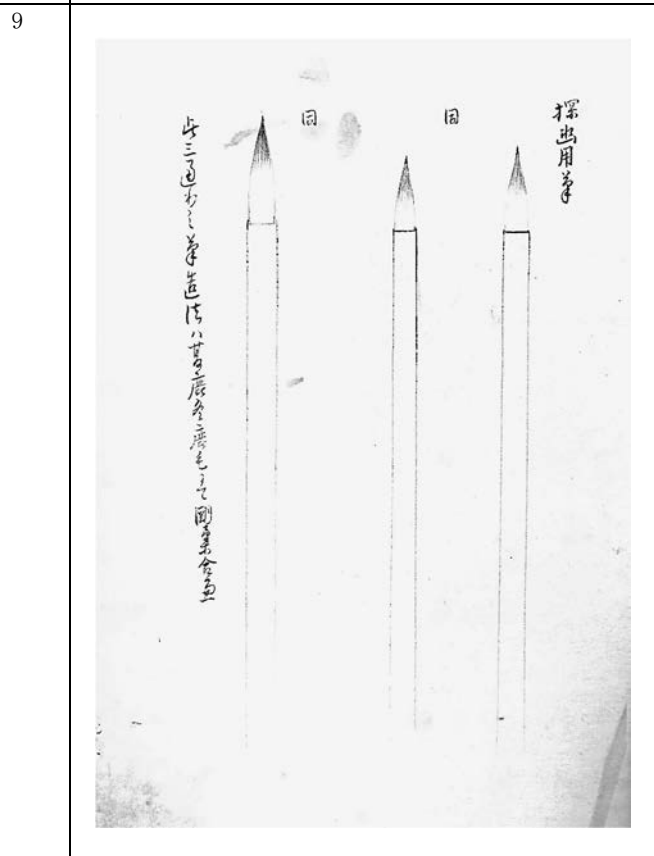
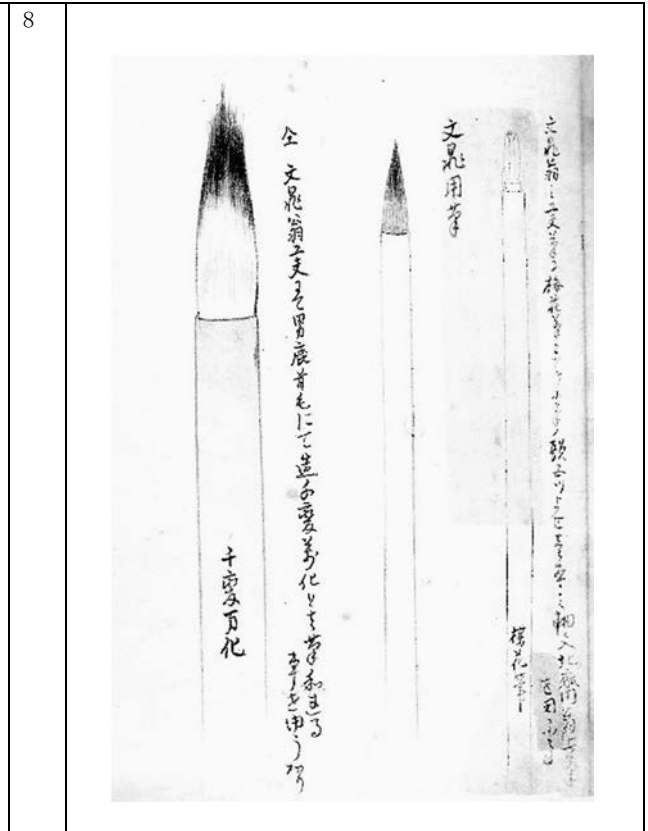
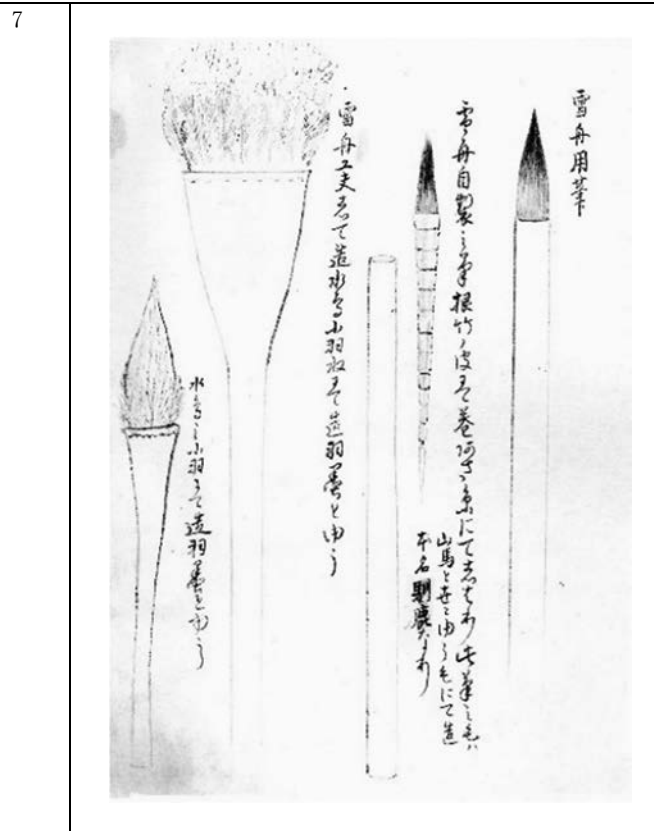
ところで、詳しくは別稿に譲るが、先に示した尾崎（2013）には得應が記したとされる『筆工製法心得』が口絵で紹介されている。掲載された口絵は、『筆譜』1 冊目 2-3 頁と 7-12 頁に類似した内容が確認できる。筆者による谷中得應軒への聞き取り<sup>1</sup>

では、大助が『筆譜』を作成した背景や時期は定かでなかった。しかし、両資料の作成者が親子であること踏まえると『筆譜』の一部は大助による『筆工製法心得』の写本とも考えられる。尾崎が示すように、『筆工製法心得』の作成目的が「大家の用筆を図して製作法を記した」<sup>2</sup>とすれば、『筆譜』からは得應が蓄積した学びを後世に残すとともに自己に還元しようとする大助の態度がうかがえる。

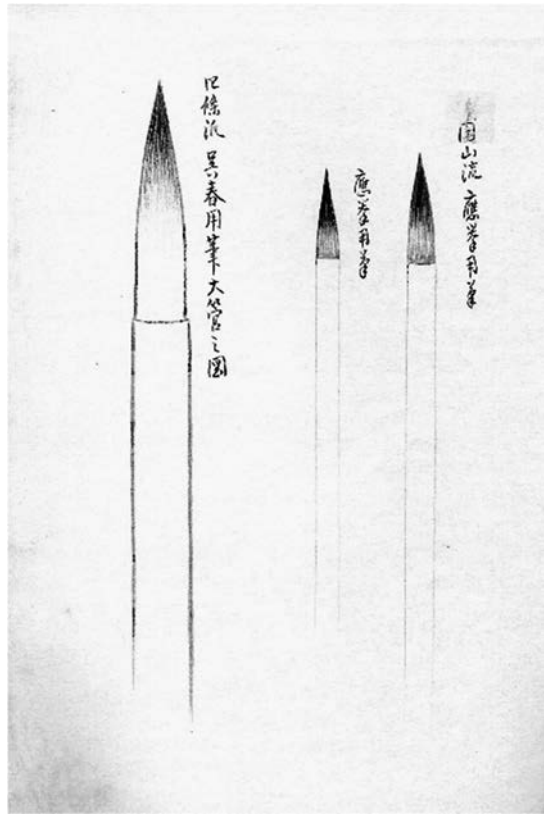
資料 1 谷中得應軒蔵 宮内大助筆『筆譜』

1 冊目			
頁	図	頁	図
1	 <p>古代の筆、鳥羽傳五、土佐三、和繪、春日。各筆の穂先と柄の細部が描かれ、それぞれに墨で書かれた文字が添えられている。</p>	2	 <p>圓月筆、全毛。各筆の穂先と柄の細部が描かれ、それぞれに墨で書かれた文字が添えられている。</p>

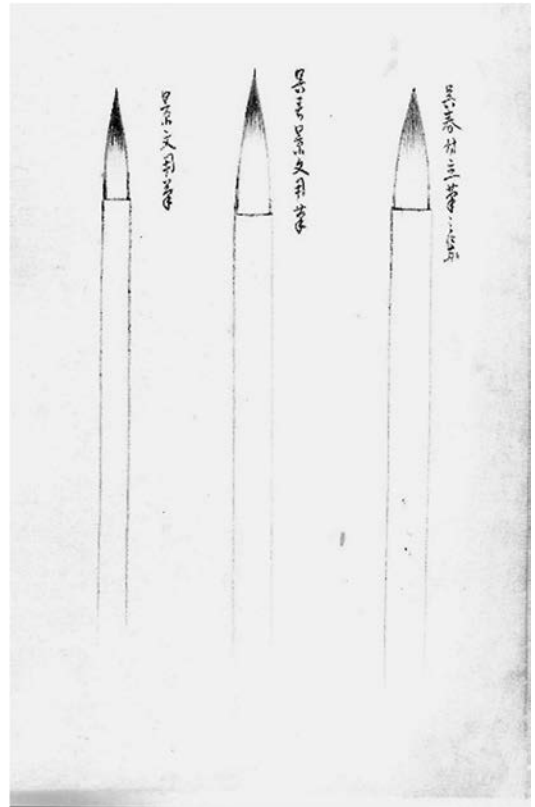




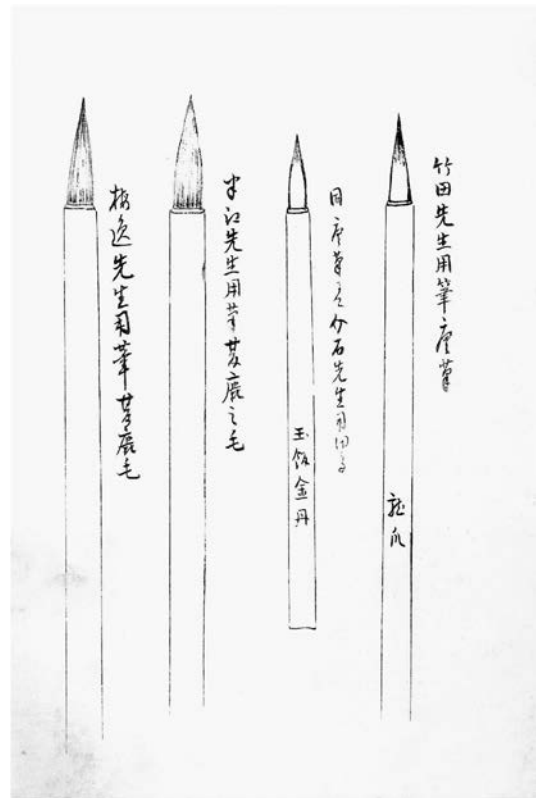
11



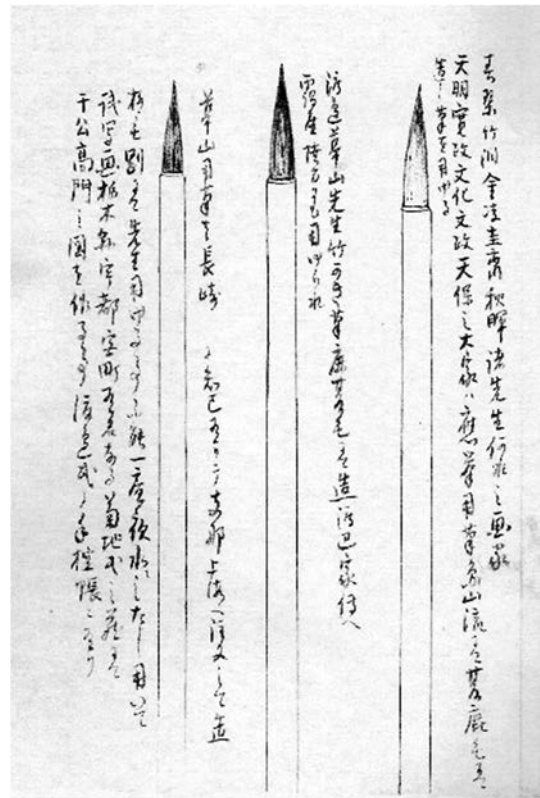
12



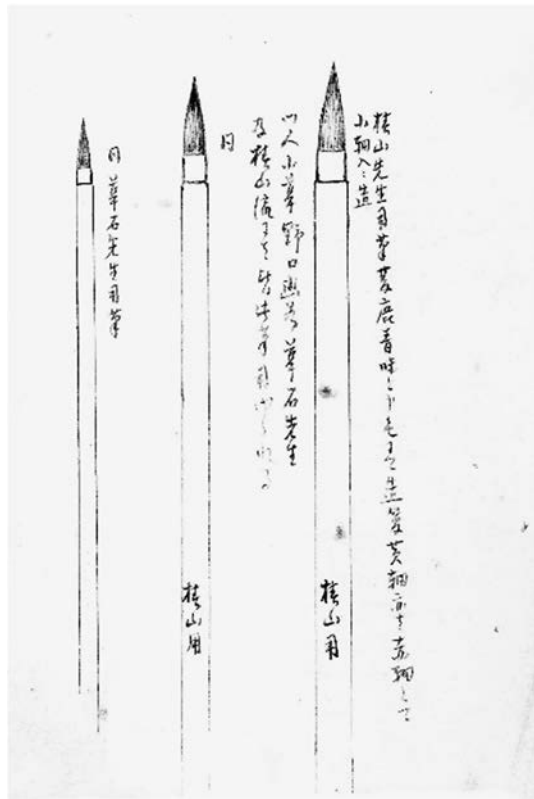
13



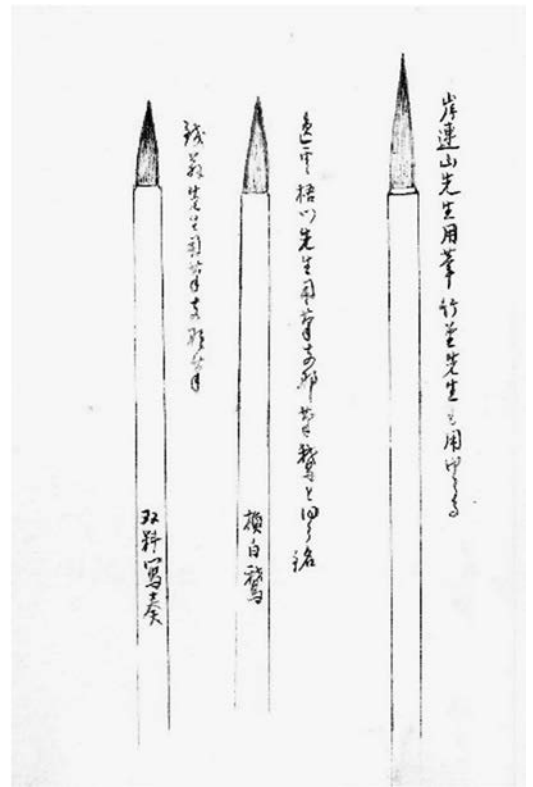
14



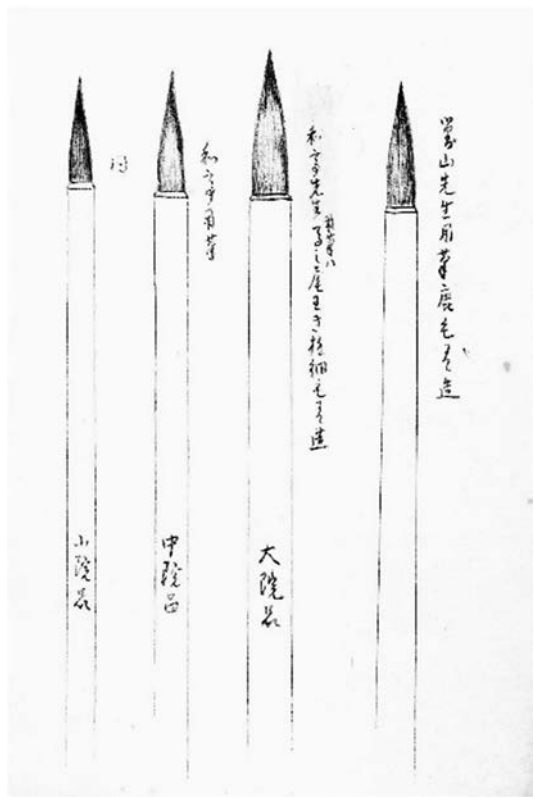
15



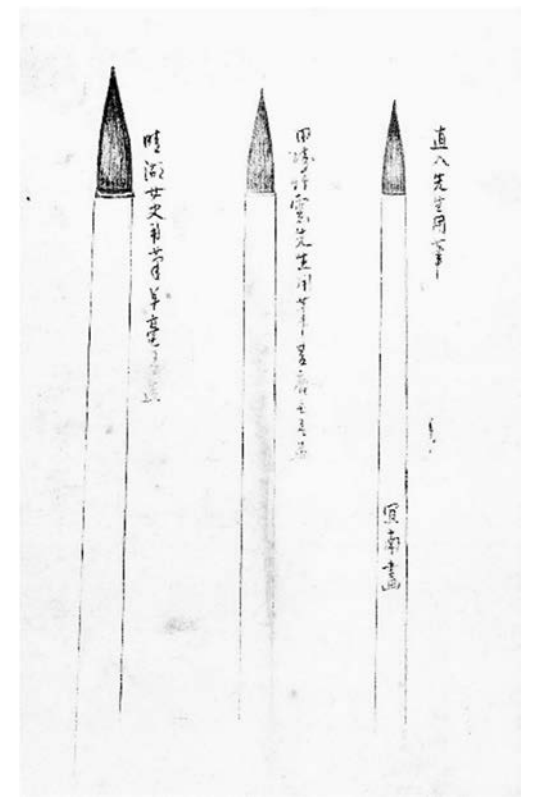
16



17

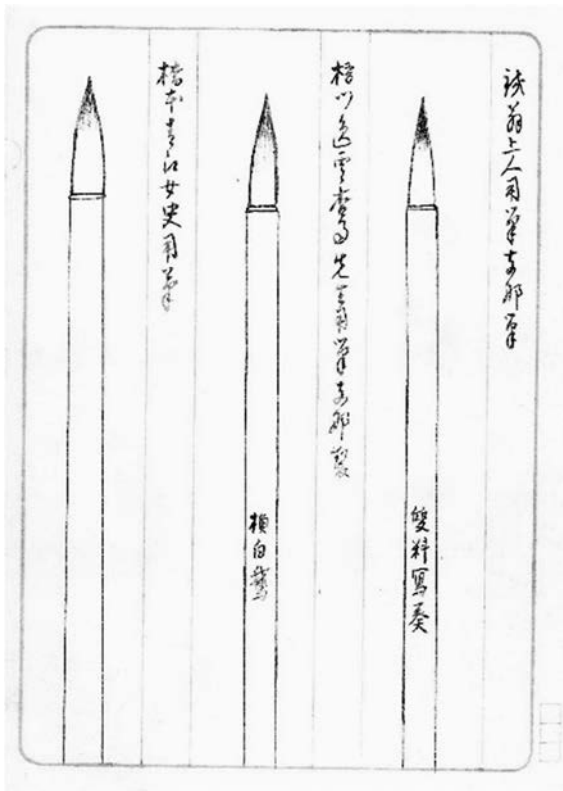


18

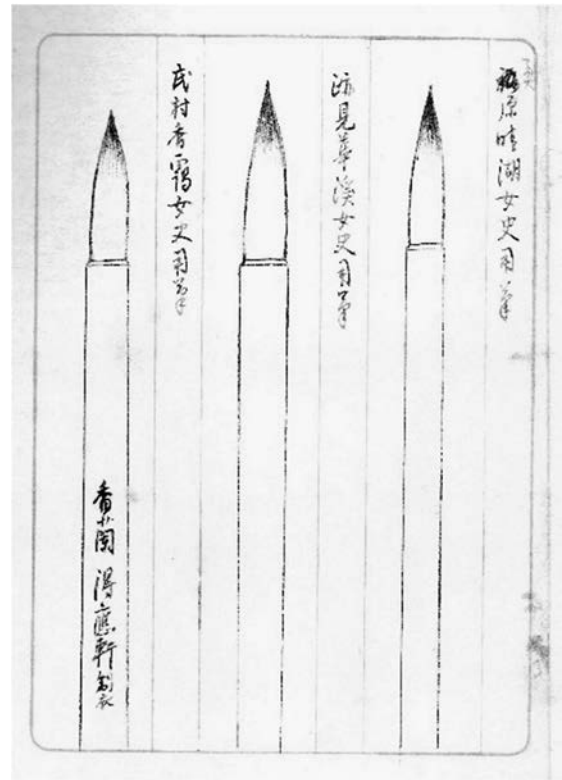


2 冊目

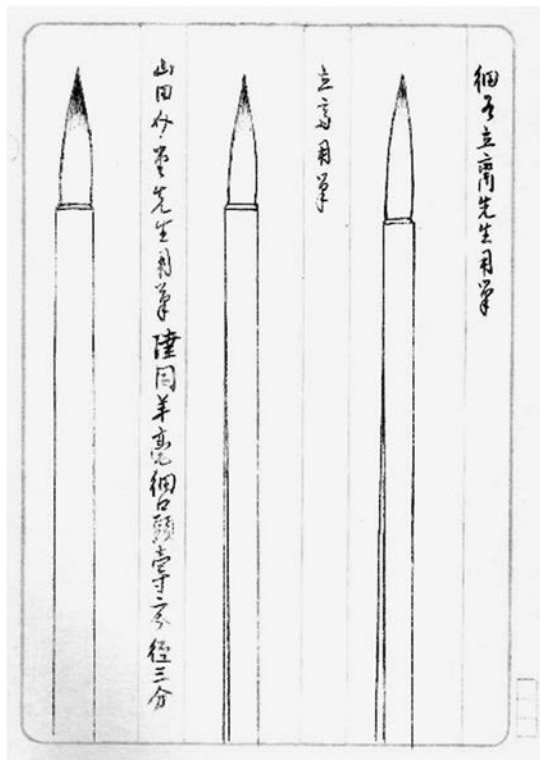
1



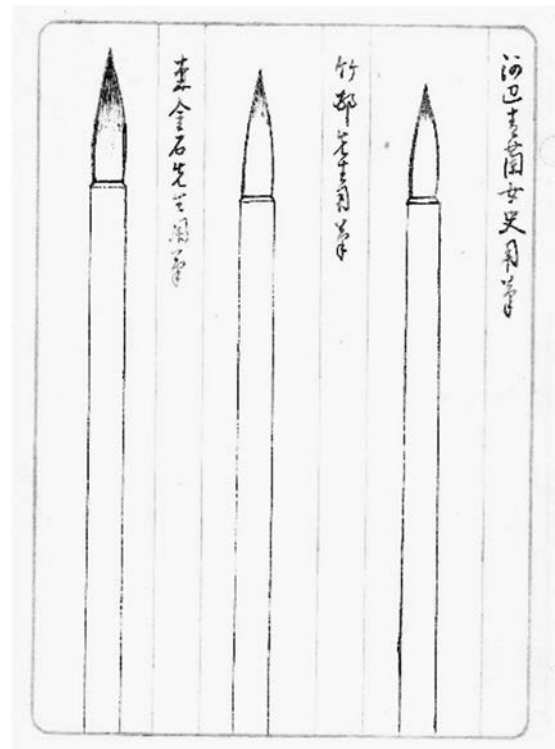
2



3

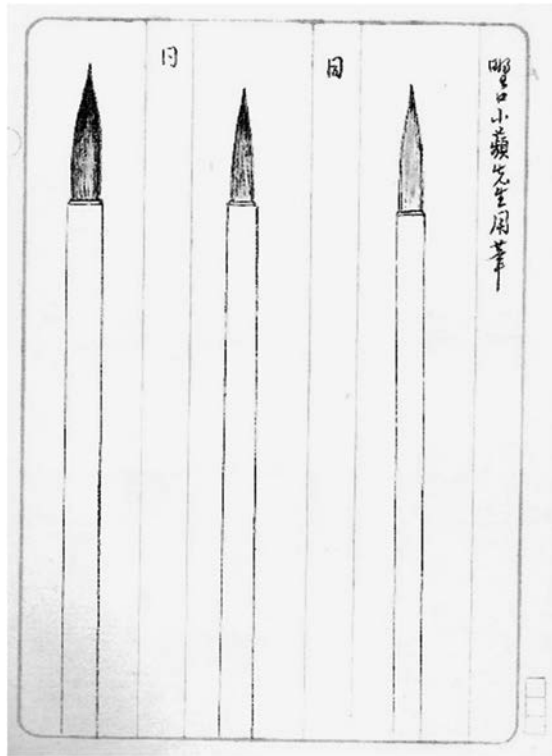


4

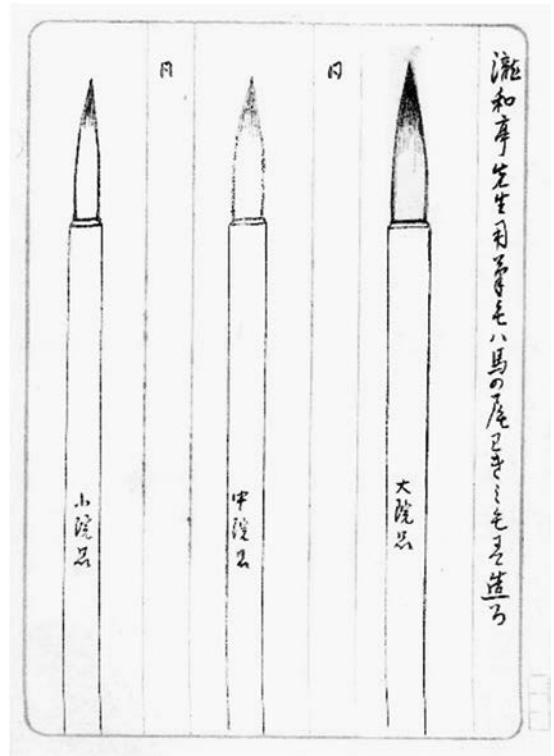




5

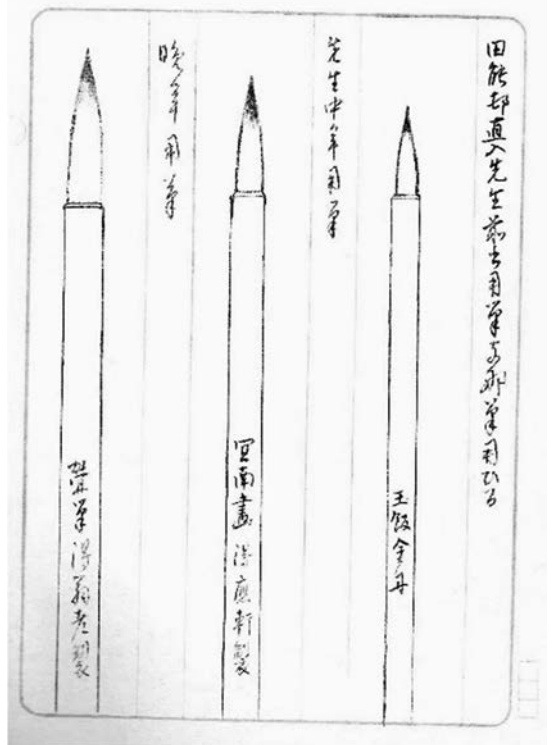


7



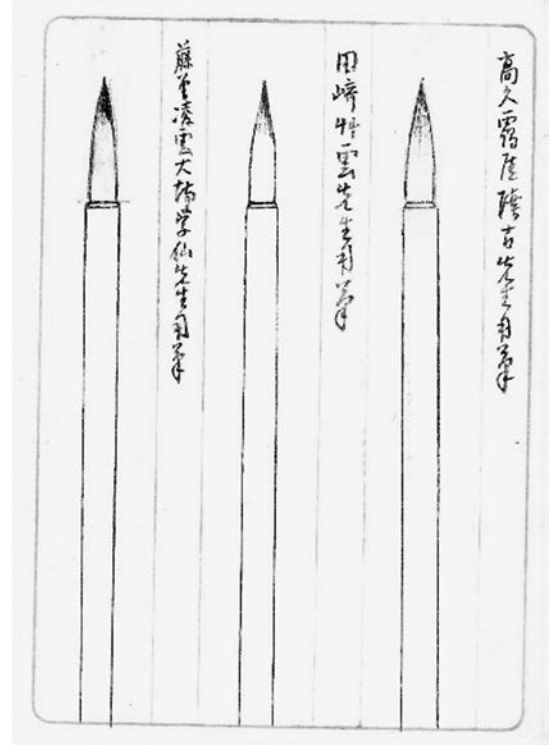
(6 頁は空白)

9

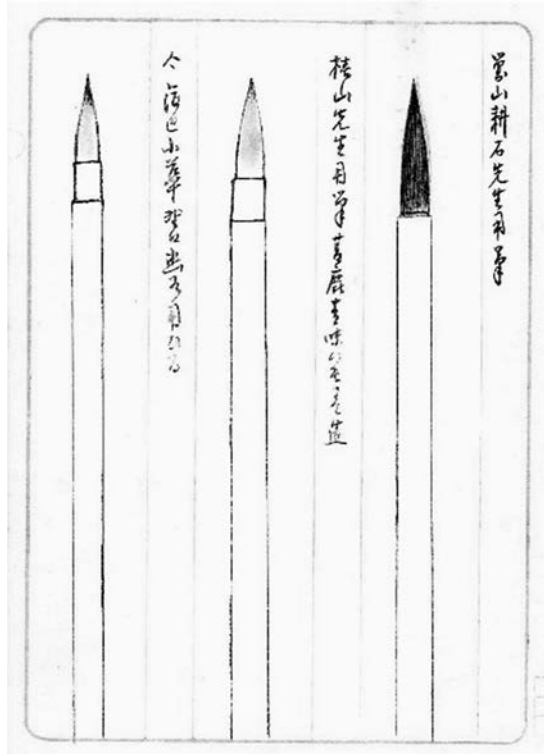


(8 頁は空白)

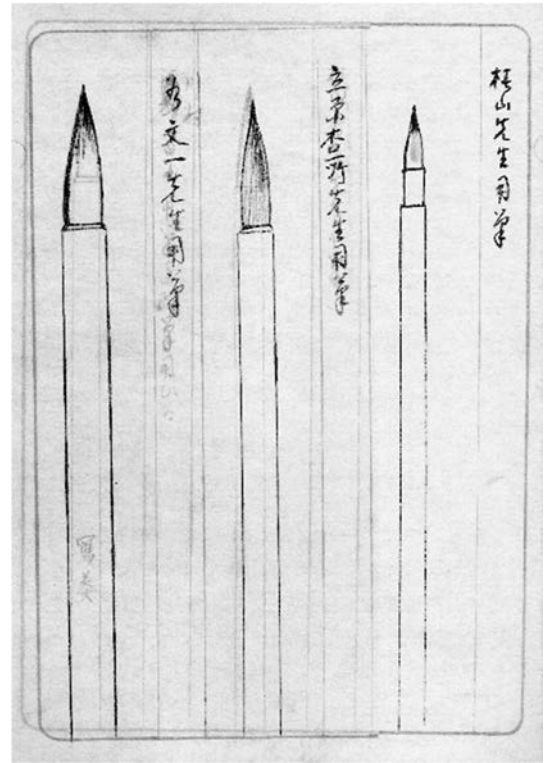
10



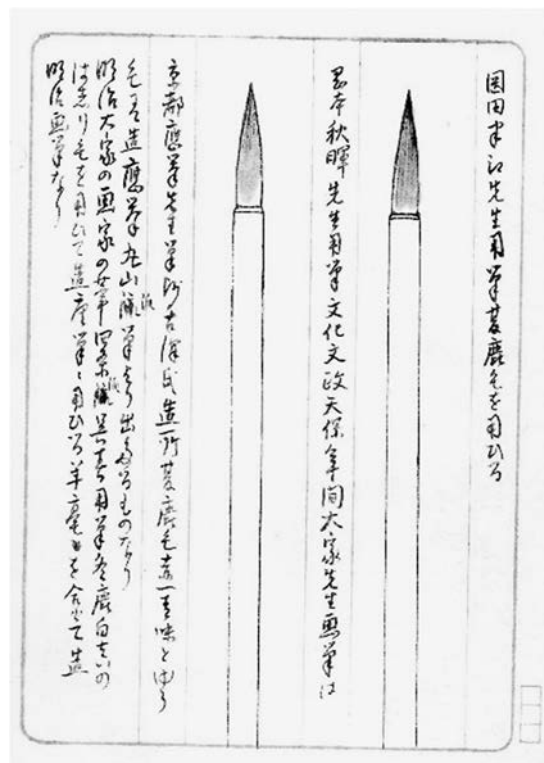
11



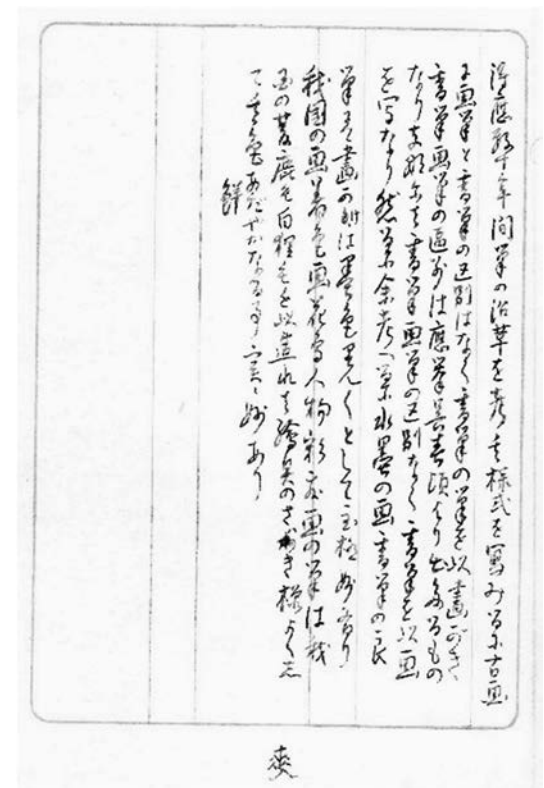
12



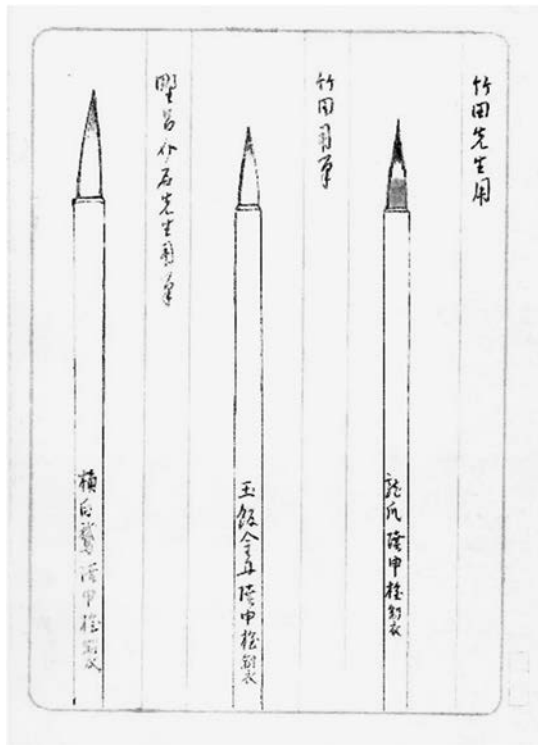
13



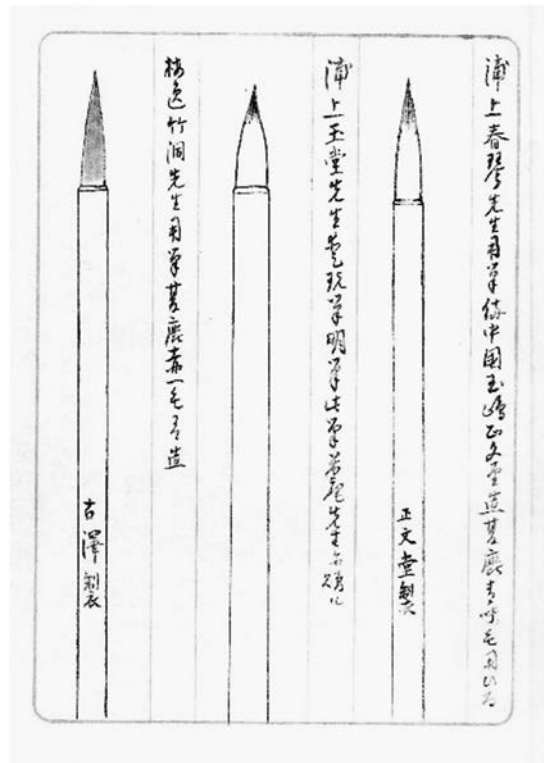
14



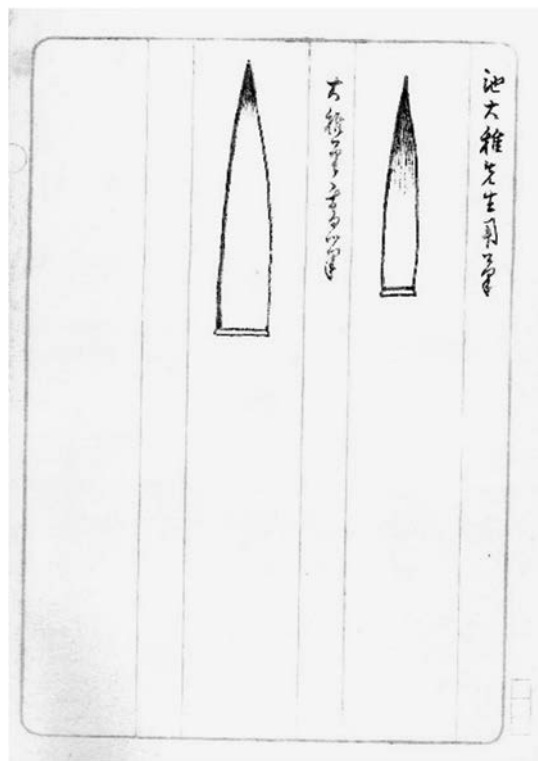
15



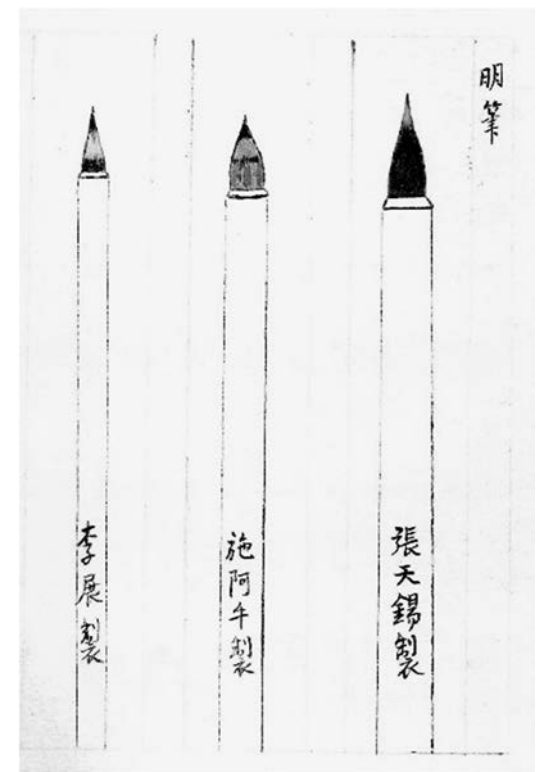
16



17

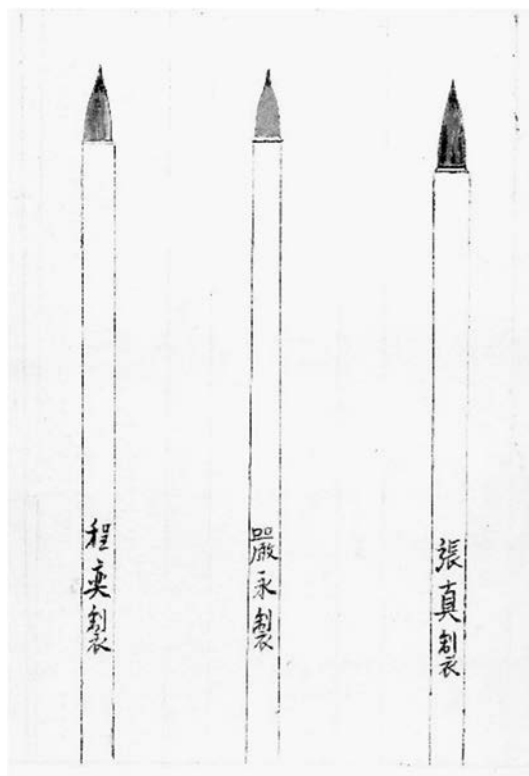


19

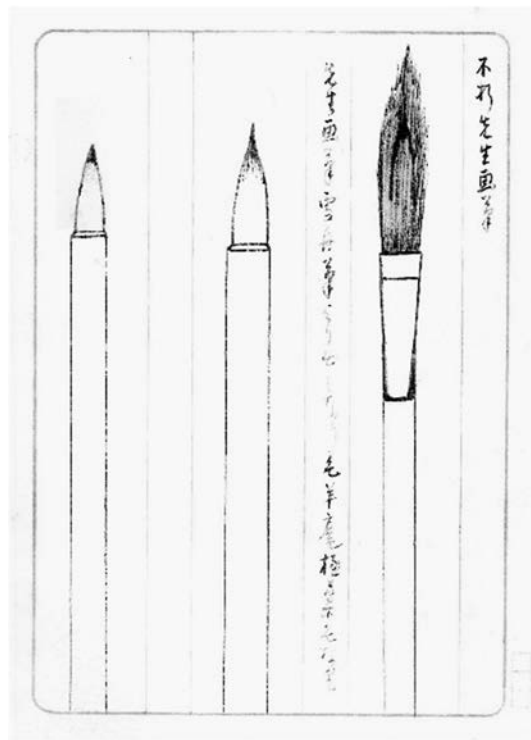


(18 頁は空白)

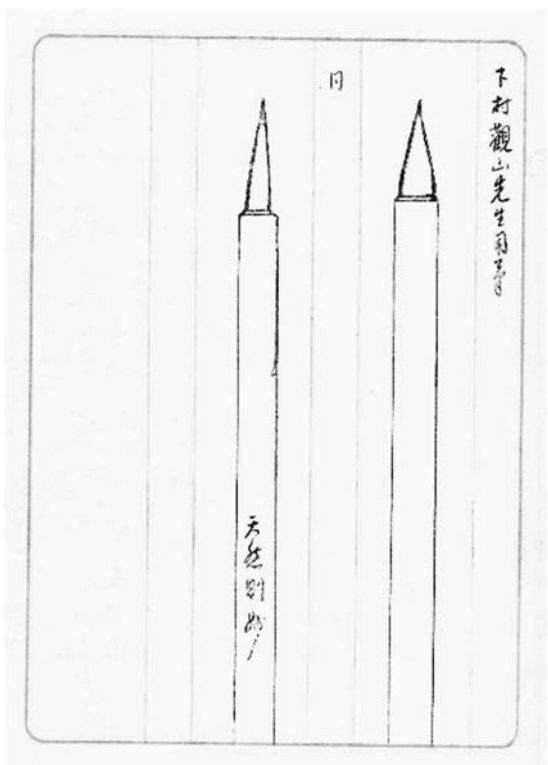
20



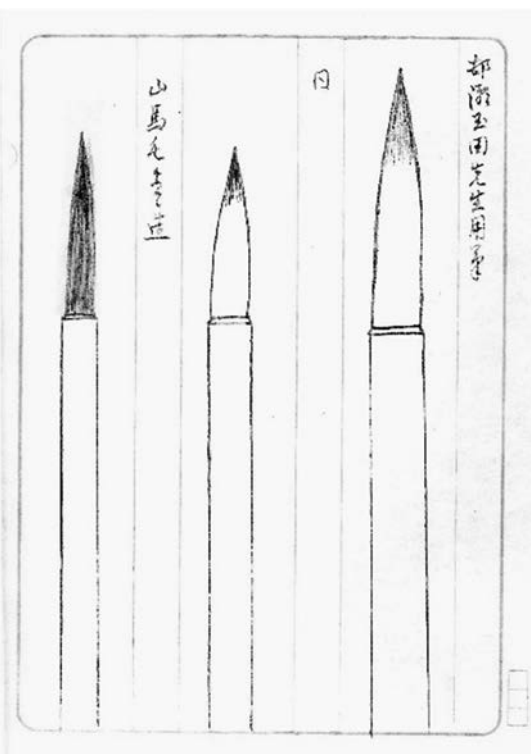
21



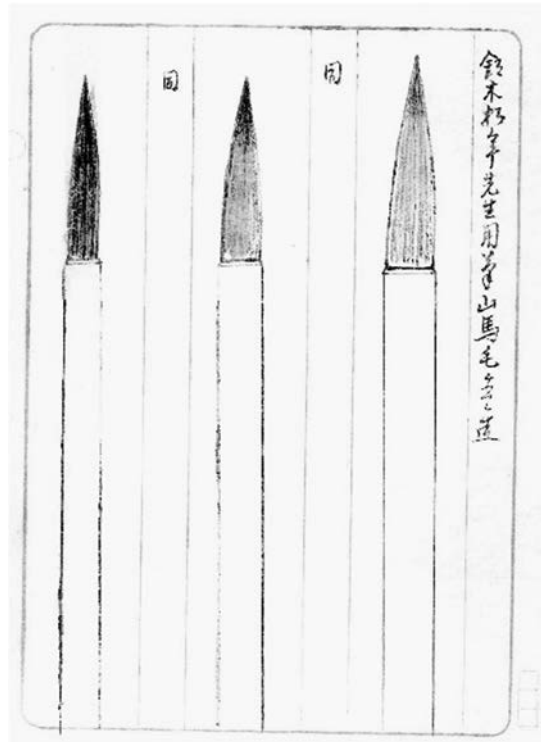
22



23

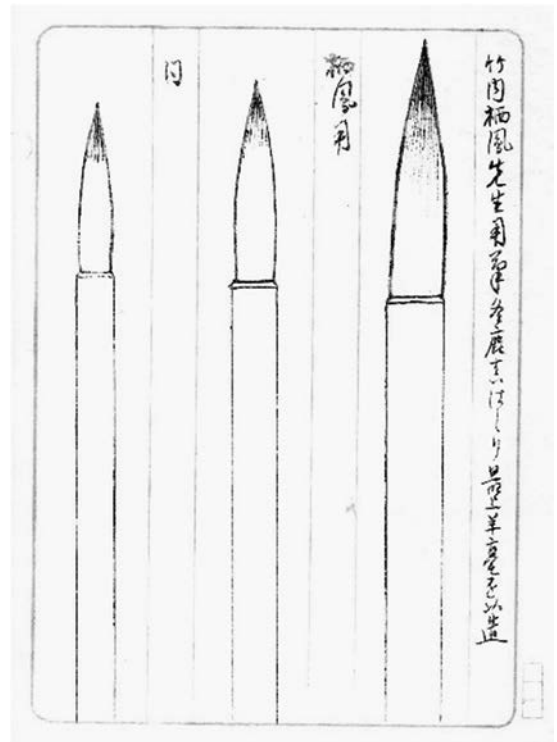


25



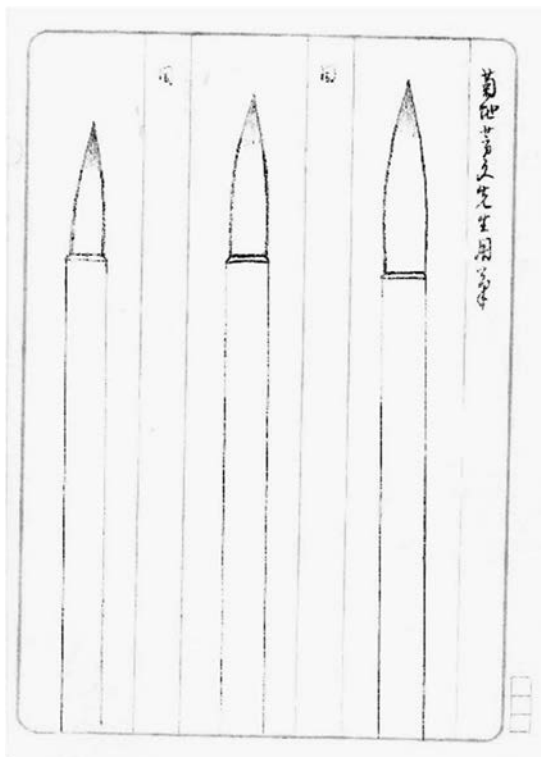
(24 頁は空白)

27



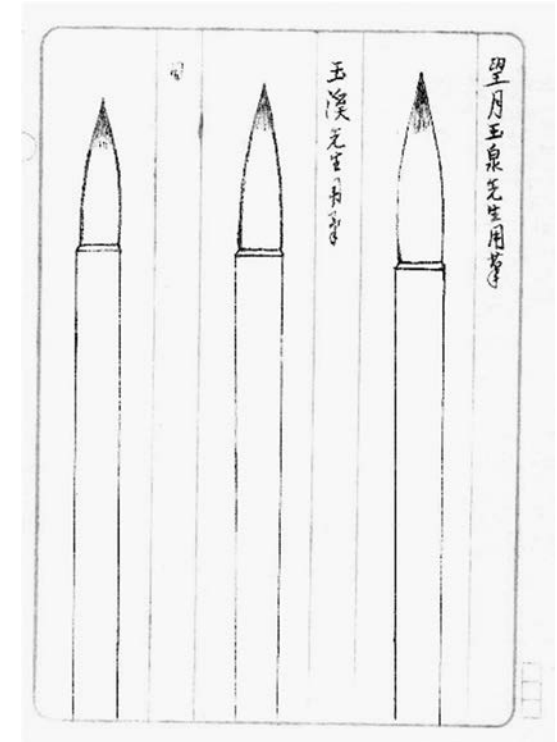
(26 頁は空白)

29



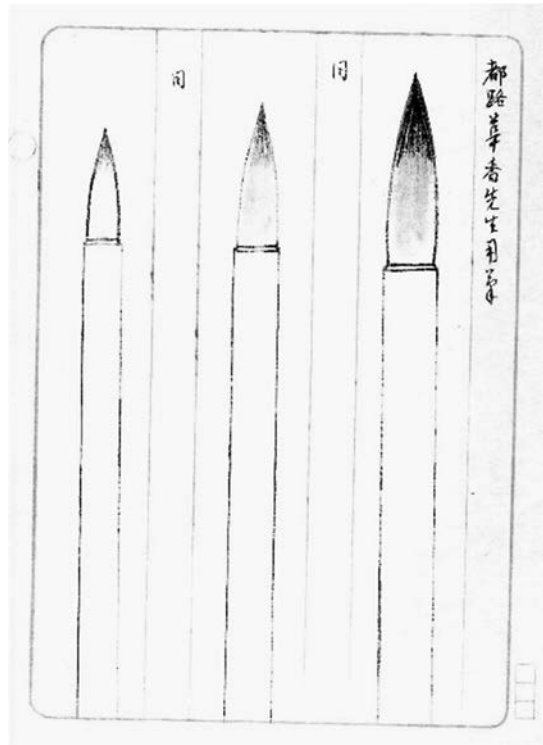
(28 頁は空白)

31



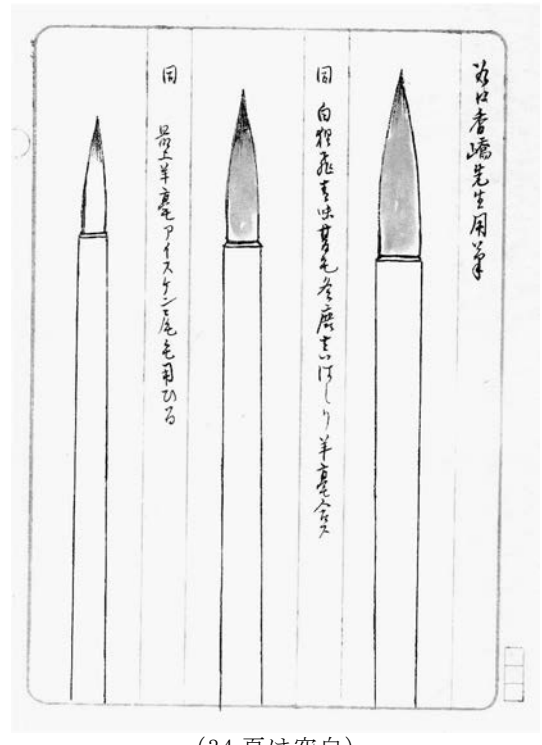
(30 頁は空白)

33



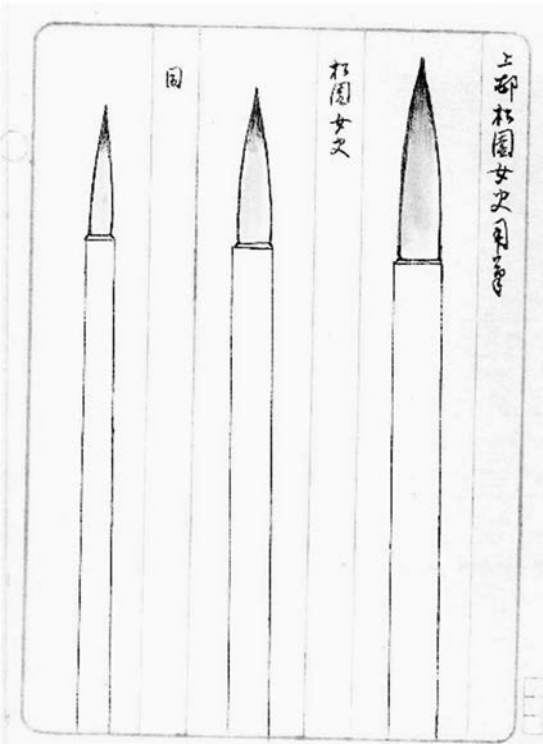
(32 頁は空白)

35



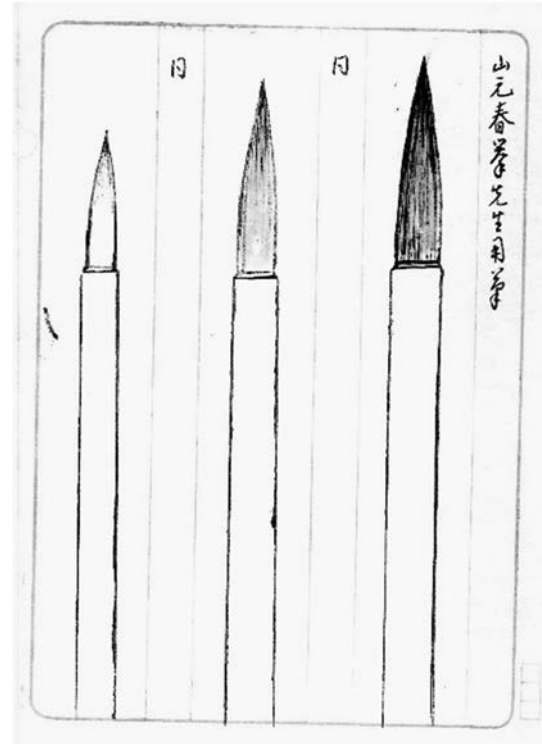
(34 頁は空白)

37

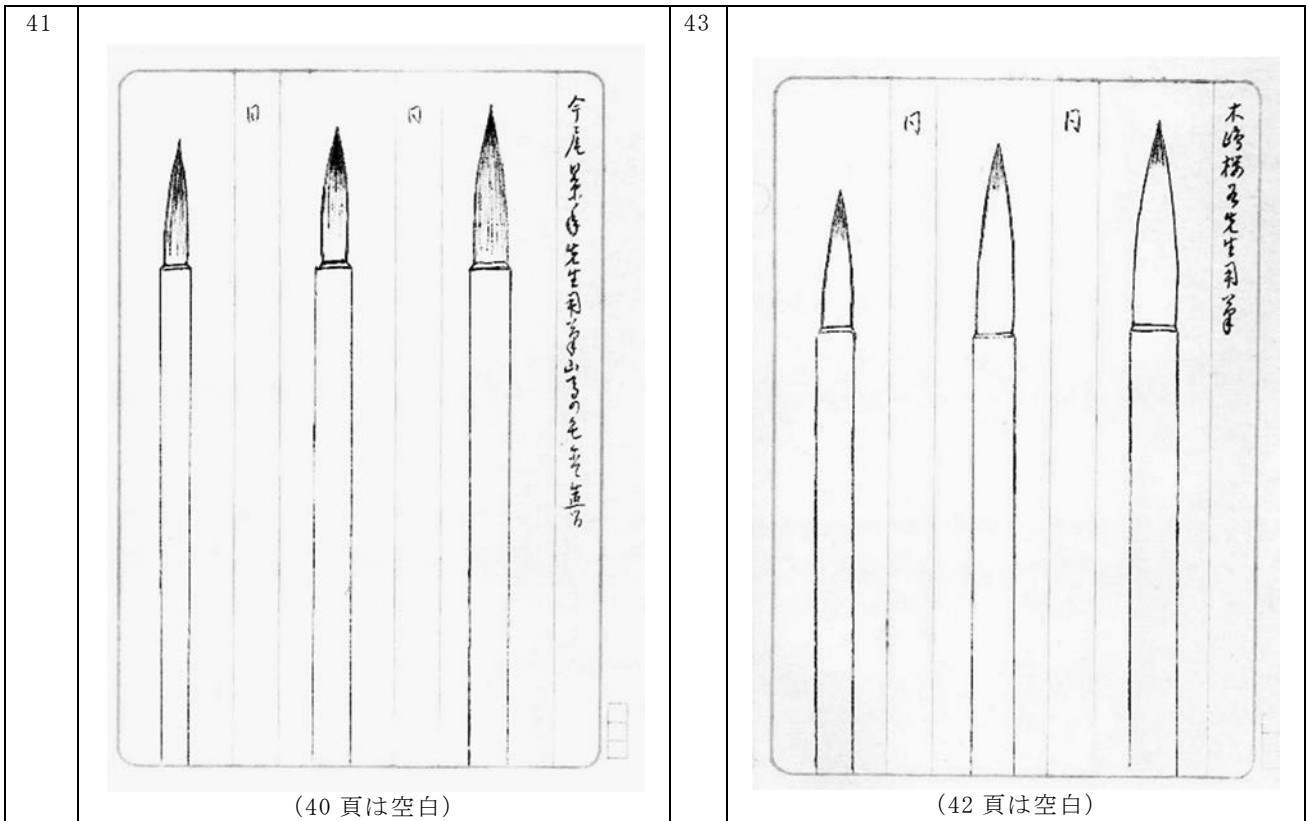


(36 頁は空白)

39



(38 頁は空白)



Ⅲ. 翻訳

本章では、下記の凡例に沿って資料 1 の各頁に対応した翻刻と書き下しを作成し、それらを基にした現代語訳を試みた（資料 2）。なお、翻訳にあたって略字などは新字体に改めた。また、訳の文言が同じであった場合は「書き下しに同じ」といった備

考のみ記した。

凡例		
頁番号		
現代語訳	書き下し	翻刻

資料2 『筆譜』の翻訳

1冊目

1		
現代語訳	書き下し	翻刻
<p>古の画家と呼ぶものは巨勢金岡、春日基光、宅間為遠、鳥羽僧正、光長、住吉慶恩、信実、粟田口隆光 〔図〕</p> <p>土佐三筆は基光、光信、光起 〔図〕</p> <p>大和絵五筆は光長、慶恩、吉光、行光、行秀 〔図〕</p> <p>春日基光は九百年前の人で、土佐守に任ぜられ従五位下に叙せられて絵所となった。 〔図〕</p> <p>これが土佐派の祖である。この五つの筆を古の画筆と称する。 〔図〕</p>	<p>和絵五筆は光長、慶恩、吉光、行光、行秀。 〔図〕</p> <p>春日基光、九百年前の人にて土佐守に任ぜられ、従五位下に叙せられ絵所となりし。 〔図〕</p> <p>これ土佐の祖なり。この五通り筆を古代の画筆と称せり。 〔図〕</p>	<p>古代乃画家を称春るもの波巨勢金岡春日基光宅間為遠 鳥羽僧正光長住吉慶恩信實粟田口隆光 〔図〕</p> <p>土佐三筆波基光光信光起 〔図〕</p> <p>和繪五筆波光長慶恩吉光行光行秀 〔図〕</p> <p>春日基光九百年前乃人にて土佐守に任せられ従五位下に叙せられ繪所となりし 〔図〕</p> <p>是土佐乃祖なり此乃五通り筆を古代乃画筆と称せ里 〔図〕</p>



2		
現代語訳	書き下し	翻刻
<p>金泥地紋描き筆はわが国の鼠の毛で造る。 〔図〕</p> <p>筆の毛は兔毛、狐毛、鼬毛、貂毛、白狸毛の尫毛、夏鹿青味、冬鹿の真はしり。書画の筆はどの筆であっても右の七種の毛を用いて剛柔兼ね合わせて造る。</p> <p>周文、秋月、啓書記、能阿弥、芸阿弥、相阿弥、僧明兆、この七人は山水・人物・花鳥を描く筆は古代の画筆と呼ぶ筆を用いる。</p> <p>狩野正信、狩野元信、永徳用の筆は鹿の夏毛赤一で造るものである。</p> <p>〔図〕 〔図〕 同用筆 同毛</p>	<p>金泥地紋かき筆は我国の鼠の毛にて造 〔図〕</p> <p>筆の毛は兔毛、狐毛、鼬毛、貂毛、白狸毛の尫毛、夏鹿青味、冬鹿の真はしり。書画筆は何れの筆にても右七種の毛を用いて剛柔相兼るものなり。</p> <p>周文、秋月、啓書記、能阿弥、芸阿弥、相阿弥、僧明兆、この七人は山水人物花鳥かきの筆は古代の画筆と称する筆を用ゆるなり。</p> <p>〔図〕 〔図〕 狩野正信、狩野元信、永徳用筆は鹿の夏毛赤一にて造るものなり。</p> <p>同用筆 〔図〕 全毛</p>	<p>金泥地紋可き筆波我国乃鼠能毛尔て造 〔図〕</p> <p>筆乃毛波兔毛狐毛鼬毛貂毛白狸毛ノ尫毛夏鹿青味冬鹿乃真者しり。書画筆波何れ乃筆尔ても右七種乃毛を用いて剛柔相兼るも乃なり。</p> <p>周文秋月啓書記能阿弥藝阿弥相阿弥 僧明兆此乃七人波山水人物花鳥かき能筆波古代乃画筆と称春る筆を用由るなり。</p> <p>〔図〕 〔図〕 狩野正信狩野元信永徳用筆波鹿乃夏毛赤一尔て造るも乃なり</p> <p>同用筆 〔図〕 全毛</p>

3		
現代語訳	書き下し	翻刻
<p>光琳、抱一の筆 〔図〕 この二本の筆は何の毛であつても極めて強い毛で造る。光琳派で金泥や胡粉を用いるには同 柔らかな毛は絵具に負けてよくない。強い毛は絵具のさばけがよくて妙趣がある。〔図〕</p> <p>同 付立て筆 鹿の真はしり毛と羊毫の強い毛を合わすとよい。〔図〕</p> <p>胡粉描き筆 得応軒慶明筆 〔図〕</p> <p>金泥描き筆 得応軒慶明筆 〔図〕</p>	<p>光琳、抱一用筆 〔図〕 この二枝の筆は何毛にても極強き毛にて造る。光琳派は金泥、胡粉用うるには同 柔かなる毛は絵具にまけて宜しからず。強毛は具のさばけ能くして妙有り。〔図〕</p> <p>同 付立て筆 鹿真はしり羊毫強き毛を合わせてよし。羊毫の毛は墨含みよくして実に妙有り。〔図〕</p> <p>胡粉かき筆 得応軒慶明筆 〔図〕</p> <p>金泥かき筆 得応軒慶明筆 〔図〕</p>	<p>光琳抱一用筆 〔図〕 此二枝乃筆波何毛尔ても極つをき毛尔て造光琳派波金泥湖粉用ふる尔者 全 柔なる毛波繪具尔まけて宜可良春強毛波具乃さはけ能して妙有り 〔図〕</p> <p>全 附立筆鹿真者しり羊毫強き毛を合してよし 羊毫乃毛波墨含よくして実ニ妙有り 〔図〕</p> <p>湖粉可き筆得應軒慶明筆 〔図〕</p> <p>金泥可き筆得應軒慶明筆 〔図〕</p>

4		
現代語訳	書き下し	翻刻
<p>小々小中大 彩色筆                      ( ) ( ) ( ) ( ) ( )                      毛は夏鹿青味と短い部分は白真<small>しろしん</small>(鹿の下腹部)という毛でどれも造る。</p>	<p>小々小中大 彩敷筆                      ( ) ( ) ( ) ( ) ( )                      毛は夏鹿青味、短き所白真と申す毛にて何れも造る。</p>	<p>小々小中大 彩敷筆                      ( ) ( ) ( ) ( ) ( )                      毛波夏鹿青味短所白真と申毛尔て何れも造</p>

5		
現代語訳	書き下し	翻刻
<p>書き下しに同じ</p>	<p>戦筆水紋描 蘭葉描                      ( )                      減筆描 枯柴描 竹笹描                      ( ) ( ) ( )                      橄欖描 折蘆描 棗核描                      ( ) ( ) ( )                      擱頭釘描</p>	<p>戦筆水紋描 蘭葉描                      ( ) ( )                      減筆描 枯柴描 竹笹描                      ( ) ( ) ( )                      橄欖描 折蘆描 棗核描                      ( ) ( ) ( )                      擱頭釘描</p>

6		
現代語訳	書き下し	翻刻
<p>鉄線描 〔図〕 釘頭鼠尾描 馬蝗描 混描</p> <p>曹衣描 〔図〕 柳葉描 蚯蚓描 行雲流水描 高古遊絲描 琴絃描</p> <p>右の人物十八描法や十九描法はこの五本の筆を使う。</p>	<p>鉄線描 〔図〕 釘頭鼠尾描 馬蝗描 混描</p> <p>曹衣描 〔図〕 柳葉描 蚯蚓描 行雲流水描 高古遊絲描 琴絃描</p> <p>右人物十八描法また十九描法はこの五本の筆を以。</p>	<p>鐵線描 〔図〕 釘頭鼠尾描 馬蝗描 混描</p> <p>曹衣描 〔図〕 柳葉描 蚯蚓描 行雲流水描 高古遊絲描 琴絃描</p> <p>右人物十八描法亦十九描法ハ此五本之筆ヲ以</p>

7		
現代語訳	書き下し	翻刻
<p>雪舟の筆 〔図〕 雪舟自家製の筆 根竹の皮で巻いて麻糸で縛る。この筆の毛は、世にいう山馬で造る。本名は馴鹿である。</p> <p>〔図〕 雪舟が工夫して造る。水鳥の小羽で造る。羽墨という。</p> <p>〔図〕 水鳥の小羽で造る。羽墨という。</p>	<p>雪舟用筆 〔図〕 雪舟自製の筆 根竹の皮にて巻き麻糸にてしぼりこの筆の毛は山馬と世に言う毛にて造る。本名馴鹿なり。</p> <p>〔図〕 雪舟工夫して造 水鳥小羽にて造る。羽墨という。</p> <p>〔図〕 水鳥の小羽にて造る。羽墨という。</p>	<p>雪舟用筆 〔図〕 雪舟自製之筆根竹ノ皮ルテ卷阿さ糸にて志者利此筆之毛ハ山馬と世に由う毛にて造 本名馴鹿なり</p> <p>〔図〕 雪舟工夫志て造水鳥小羽ねルて造羽墨と由う</p> <p>〔図〕 水鳥之小羽ルて造羽墨と由う</p>

8		
現代語訳	書き下し	翻刻
<p>文晁翁が工夫した筆に梅花筆という筆がある。小筆の頭を五つ寄せて一本の軸に入れる。北斎もこの筆を用いる。</p> <p>〔図〕 梅花筆</p> <p>文晁の筆</p> <p>〔図〕</p> <p>同 文晁翁の工夫によって雄鹿首毛で造る。千変万化とは筆（の毛の部分）が割れる事をいう。</p> <p>〔図〕 千変万化</p>	<p>文晁翁の工夫筆に梅花筆と申して小筆の頭五つよせ一本の軸に入れる。北斎翁この筆を用うる。</p> <p>〔図〕 梅花筆</p> <p>文晁用筆</p> <p>〔図〕</p> <p>同 文晁翁工夫にて雄鹿首毛にて造る。千変万化とは筆割れる事をいうなり。</p> <p>〔図〕 千変万化</p>	<p>文晁翁之工夫筆尔梅花筆と申テ小筆ノ頭五ツよせ壹本之軸ニ入北斎翁此筆を用ふる</p> <p>〔図〕 梅花筆</p> <p>文晁用筆</p> <p>〔図〕</p> <p>全 文晁翁工夫尔て雄鹿首毛にて造千変万化と者筆和連る</p> <p>〔図〕 千変万化 事を由う成り</p>

9		
現代語訳	書き下し	翻刻
<p>探幽の筆 〔図〕 同 〔図〕 同 〔図〕 この三通りの筆 兼ね合わせる。</p> <p>造り方は夏鹿と冬鹿の毛で剛さと柔らかさを</p>	<p>探幽用筆 〔図〕 同 〔図〕 同 〔図〕 この三通りの筆 造法は夏鹿、冬鹿毛にて剛柔合兼ねる。</p>	<p>探幽用筆 〔図〕 同 〔図〕 同 〔図〕 此三通利之筆造法ハ夏鹿冬鹿毛ルテ剛柔合兼</p>

10		
現代語訳	書き下し	翻刻
<p>大雅堂の筆 〔図〕 同 〔図〕 蕪村の筆 〔図〕 筆の製法</p> <p>冬鹿の真はしり毛に羊毫を合わせて造るのがよい。</p>	<p>大雅堂用筆 〔図〕 同 〔図〕 蕪村用筆 〔図〕 筆の製法</p> <p>冬鹿真はしり毛に羊毫合わして造りてよろし。</p>	<p>大雅堂用筆 〔図〕 同 〔図〕 蕪村用筆 〔図〕 筆之製法冬鹿真者志利毛ニ羊毫合志て造てよろし</p>

11		
現代語訳	書き下し	翻刻
四条派呉春の筆 大管の図 (図) 円山流 応挙の筆 (図)	四条派呉春用筆 大管の図 (図) 円山流 応挙用筆 (図)	圓山流應挙用筆 (図) 應挙用筆 (図) 四條派呉春用筆大管之図 (図)
12		
現代語訳	書き下し	翻刻
呉春用付立て筆の図 (図) 呉春、景文の筆 (図) 景文の筆 (図)	呉春付立て筆の図 (図) 呉春、景文用筆 (図) 景文用筆 (図)	呉春付立筆之図 (図) 呉春景文用筆 (図) 景文用筆 (図)
13		
現代語訳	書き下し	翻刻
竹田先生の筆 唐筆 (図) 同 唐筆にて介石先生が使う。 龍爪 (図) 半江先生の筆 夏鹿の毛 (図) 梅逸先生の筆 夏鹿毛 (図)	竹田先生用筆 唐筆 (図) 同 唐筆にて介石先生用ゆる 龍爪 (図) 玉飯金丹 半江先生用筆 夏鹿の毛 (図) 梅逸先生用筆 夏鹿毛 (図)	竹田先生用筆唐筆 (図) 同 唐筆ルて介石先生用由る 龍爪 (図) 玉飯金丹 半江先生用筆夏鹿之毛 (図) 梅逸先生用筆夏鹿毛 (図)

14		
現代語訳	書き下し	翻刻
<p>春琴、竹洞、金陵、圭齋、秋暉の諸先生、どの画家も天明・寛政・文化・文政・天保の大家は応挙の筆、円山流の夏鹿毛で造った筆を用いる。 〔図〕 渡辺華山先生の竹描き筆は鹿夏毛にて造ると渡辺家が伝え、靄厓や隆古も用いる。 〔図〕 華山の筆は長崎 知り合いがいて中国上海へ注文して造る。 〔図〕 極めて毛が固いもので先生が用いるものは一昼夜十分に水に浸して使う。試写した画は栃木県宇都宮町で著名な菊地氏の蔵にあって、千公高門の図を作ったことが渡辺氏の手控帳に記されている。</p>	<p>春琴、竹洞、金陵、圭齋、秋暉諸先生、何れの画家 天明・寛政・文化・文政・天保の大家は応挙用筆、円山流にて夏鹿毛にて 造し筆を用ゆる。 〔図〕 渡辺華山先生竹かき筆 鹿夏毛にて造る渡辺家伝へ 靄厓、隆古にも用ゆられ 〔図〕 華山用筆は長崎 知己有りて支那上海へ注文して造る。 〔図〕 極毛剛にて先生用ゆるものに能く一昼夜水に浸し用いて 試写した画は栃木県宇都宮町有名なる菊地氏の蔵にて 千公高門の図を作る事渡辺氏の手控帳に有り。</p>	<p>春琴竹洞金陵圭齋秋暉諸先生何れの画家 天明寛政文化文政天保の大家ハ應挙用筆圓山流ルテ夏鹿毛ルテ 造し筆を用ゆる 〔図〕 渡邊華山先生竹可き筆鹿夏毛ルテ造渡辺家傳へ 靄厓隆古にも用由られ 〔図〕 華山用筆者長崎 尔知己有りテ支那上海へ注文して造 〔図〕 極毛剛ルテ先生用由るもの尔能一昼夜水ニしたし用いて 試写画栃木県宇都宮町有名奈る菊地氏之蔵ルテ 千公高門之図を作る事渡邊氏ノ手控帳ニ有り</p>



15		
現代語訳	書き下し	翻刻
<p>椿山先生の筆。夏鹿青味と申す毛にて造る。筆管は黄軸または赤軸で、小軸入りに造る。</p> <p>(図)</p> <p>門人の小華、野口幽谷、華石先生および椿山流では皆この筆が用いられる。</p> <p>同</p> <p>(図)</p> <p>同 華石先生の筆</p> <p>(図)</p> <p>椿山用</p>	<p>椿山先生用筆。夏鹿青味と申す毛にて造る。管黄軸亦是赤軸して小軸入りに造る。</p> <p>(図)</p> <p>門人小華、野口幽谷、華石先生及び椿山流には皆この筆用ゆられる。</p> <p>同</p> <p>(図)</p> <p>同 華石先生用筆</p> <p>(図)</p> <p>椿山用</p>	<p>椿山先生用筆。夏鹿青味と申す毛にて造管黄軸亦是赤軸して小軸入りに造る。</p> <p>(図)</p> <p>門人小華野口幽谷華石先生及椿山流者皆此筆用由られる</p> <p>同</p> <p>(図)</p> <p>同 華石先生用筆</p> <p>(図)</p> <p>椿山用</p>

16		
現代語訳	書き下し	翻刻
<p>岸連山先生の筆。竹堂先生も用いられる。</p> <p>(図)</p> <p>逸雲、梧門先生の筆。支那筆。銘を鷺という</p> <p>(図)</p> <p>鍔翁先生の筆。支那筆</p> <p>(図)</p> <p>双料写奏</p>	<p>岸連山先生用筆。竹堂先生も用ゆらる</p> <p>(図)</p> <p>逸雲、梧門先生用筆。支那筆。鷺という銘</p> <p>(図)</p> <p>鍔翁先生用筆。支那筆</p> <p>(図)</p> <p>双料寫奏</p>	<p>岸連山先生用筆。竹堂先生も用由らる</p> <p>(図)</p> <p>逸雲梧門先生用筆支那筆鷺と由う銘</p> <p>(図)</p> <p>鍔翁先生用筆支那筆</p> <p>(図)</p> <p>双料寫奏</p>

17		
現代語訳	書き下し	翻刻
<p>対山先生の筆 鹿毛で造る。 〔図〕 和亭先生の筆は馬の尾わきの極細毛で造る。 〔図〕 和亭の筆 〔図〕 同 〔図〕</p> <p>大院品 中院品 小院品</p>	<p>対山先生用筆 鹿毛にて造る。 〔図〕 用筆は 和亭先生 馬の尾わき極細毛にて造る。 〔図〕 和亭用筆 〔図〕 同 〔図〕</p> <p>大院品 中院品 小院品</p>	<p>對山先生用筆鹿毛にて造 〔図〕 用筆ハ 和亭先生 馬之尾王き極細毛にて造 〔図〕 和亭用筆 〔図〕 同 〔図〕</p> <p>大院品 中院品 小院品</p>

18		
現代語訳	書き下し	翻刻
<p>直入先生の筆 〔図〕 田崎草雲先生の筆 夏鹿毛で造る。 〔図〕 晴湖女史の筆 羊毫で造る。 〔図〕</p> <p>直南画</p>	<p>直入先生用筆 〔図〕 田崎草雲先生用筆 夏鹿毛にて造る。 〔図〕 晴湖女史用筆 羊毫にて造る。 〔図〕</p> <p>直南画</p>	<p>直入先生用筆 〔図〕 田崎草雲先生用筆夏鹿毛にて造 〔図〕 晴湖女史用筆羊毫にて造 〔図〕</p> <p>直南画</p>

2冊目

1		
現代語訳	書き下し	翻刻
<p>缺翁上人の筆 支那筆 〔図〕 梧門、逸雲、杏雨先生の筆 雙料寫奏 〔図〕 橋本青江女史の筆 〔図〕</p> <p>横白鷺</p>	<p>缺翁上人用筆 支那筆 〔図〕 梧門、逸雲、杏雨先生用筆 雙料寫奏 〔図〕 橋本青江女史用筆 〔図〕</p> <p>横白鷺</p>	<p>缺翁上人用筆支那筆 〔図〕 梧門逸雲杏雨先生用筆支那製 雙料寫奏 〔図〕 橋本青江女史用筆 〔図〕</p> <p>横白鷺</p>

2		
現代語訳	書き下し	翻刻
奥原晴湖女史の筆 〔図〕 跡見華溪女史の筆 〔図〕 武村香靄女史の筆 〔図〕 香蘭得應軒製	翻刻に同じ	●奥原晴湖女史用筆 〔図〕 跡見華溪女史用筆 〔図〕 武村香靄女史用筆 〔図〕 香蘭得應軒製

3		
現代語訳	書き下し	翻刻
細谷立斎先生の筆 〔図〕 立斎の筆 〔図〕 山田介堂先生の筆 〔図〕 陸同 羊毫細口で頭は一寸二分(約4.5cm) 径は三分(約1.1cm)	細谷立斎先生用筆 〔図〕 立斎用筆 〔図〕 山田介堂先生用筆 〔図〕 陸同 羊毫細口頭一寸二分径三分	細谷立斎先生用筆 〔図〕 立斎用筆 〔図〕 山田介堂先生用筆 〔図〕 陸同 羊毫細口頭一寸二分径三分

4		
現代語訳	書き下し	翻刻
河辺青蘭女史の筆 〔図〕 竹邨先生の筆 〔図〕 森金石先生の筆 〔図〕	翻刻に同じ	河辺青蘭女史用筆 〔図〕 竹邨先生用筆 〔図〕 森金石先生用筆 〔図〕

5		
現代語訳	書き下し	翻刻
<p>同 同 野口小蘋先生の筆 〔図〕 〔図〕 〔図〕</p>	<p>翻刻に同じ</p>	<p>同 同 野口小蘋先生用筆 〔図〕 〔図〕 〔図〕</p>

7		
現代語訳	書き下し	翻刻
<p>同 同 瀧和亭先生の筆 〔図〕 〔図〕 〔図〕</p> <p>毛は馬の尾わきの毛で造る。</p> <p>小院品 中院品 大院品</p>	<p>同 同 瀧和亭先生用筆 〔図〕 〔図〕 〔図〕</p> <p>毛は馬の尾わきの毛にて造る。</p> <p>小院品 中院品 大院品</p>	<p>同 同 瀧和亭先生用筆毛ハ馬の尾王きの毛ルて造る 〔図〕 〔図〕 〔図〕</p> <p>小院品 中院品 大院品</p>

9		
現代語訳	書き下し	翻刻
<p>田能村直入先生 前書の筆 〔図〕 〔図〕</p> <p>先生が中年の筆</p> <p>晩年の筆 〔図〕</p> <p>支那筆を用いる 玉飯金丹</p> <p>髯筆 得翁老製 〔図〕</p> <p>宜南画 得応軒製</p>	<p>田能村直入先生 前書用筆 〔図〕 〔図〕</p> <p>先生 中年用筆</p> <p>晩年用筆 〔図〕</p> <p>支那筆用いる 玉飯金丹</p> <p>髯筆 得翁老製 〔図〕</p> <p>宜南画 得応軒製</p>	<p>田能邨直入先生前書用筆支那筆用ひる 〔図〕 〔図〕</p> <p>先生 中年用筆</p> <p>晩年用筆 〔図〕</p> <p>支那筆用いる 玉飯金丹</p> <p>髯筆 得翁老製 〔図〕</p> <p>宜南画 得應軒製</p>

10		
現代語訳	書き下し	翻刻
高久靄厓、隆古先生の筆 (☒) 田崎草雲先生の筆 (☒) 藤堂凌雲、大場学仙先生の筆 (☒)	高久靄厓、隆古先生用筆 (☒) 田崎草雲先生用筆 (☒) 藤堂凌雲、大場学仙先生用筆 (☒)	高久靄厓隆古先生用筆 (☒) 田崎草雲先生用筆 (☒) 藤堂凌雲大場学仙先生用筆 (☒)

11		
現代語訳	書き下し	翻刻
対山、耕石先生の筆 (☒) 椿山先生の筆 夏鹿青味の毛にて造る (☒) 同 渡辺小華、野口幽谷が用いる (☒)	対山、耕石先生用筆 (☒) 椿山先生用筆 夏鹿青味の毛にて造る (☒) 同 渡辺小華、野口幽谷用いる (☒)	対山耕石先生用筆 (☒) 椿山先生用筆夏鹿青味の毛にて造る (☒) 全渡辺小華野口幽谷用ひる (☒)

12		
現代語訳	書き下し	翻刻
椿山先生の筆 (☒) 立原杏所先生の筆 (☒) 谷文一先生の筆 (☒)	翻刻に同じ	椿山先生用筆 (☒) 立原杏所先生用筆 (☒) 谷文一先生用筆 (☒)

13		
現代語訳	書き下し	翻刻
<p>岡田半江先生の筆 夏鹿毛を用いる。 〔図〕 岡本秋暉先生の筆 文化・文政・天保年間の大家先生の画筆は 〔図〕 京都応挙先生の筆師、古沢氏が造るもので、夏鹿毛の赤一や青味という毛で造る円山派の筆からうまれたものである。明治大家の画家の筆、四条派呉春用の筆は冬鹿白真のはしり毛を用いて造る。唐筆で使う羊毫を合わせて造る明治の画筆である。</p>	<p>岡田半江先生用筆 夏鹿毛を用いる。 〔図〕 岡本秋暉先生用筆 文化・文政・天保年間大家先生画筆は 〔図〕 京都応挙先生筆師、古沢氏造る所、夏鹿毛赤一、青味という毛にて造る応挙丸山派筆より出でたるものなり。 明治大家の画家の筆、四条派呉春用筆、冬鹿白真のはしり毛を用いて造る。唐筆に用いる羊毫を合せて造る明治画筆なり。</p>	<p>岡田半江先生用筆夏鹿毛を用ひる 〔図〕 岡本秋暉先生用筆文化文政天保年間大家先生画筆は 〔図〕 京都應挙先生筆師古澤氏造所夏鹿毛赤一青味と由う毛ルて造應挙丸山派筆より出多るものなり 明治大家の画家の筆四条派呉春用筆冬鹿白真のはしり毛を用ひて造唐筆ニ用ひる羊毫を合せて造明治画筆なり</p>

14		
現代語訳	書き下し	翻刻
<p>得応が数十年間、筆の歴史を考えてその様式と照らし合わせる と、古画に画筆と書筆の区別はなく書の筆で絵を描いており、 書筆と画筆の区別は応挙や呉春の頃から出たものである。中国 では書筆と画筆の区別はなく書筆で絵を描く。そのため、私が 考えるに水墨画も書筆の良い筆で描けば墨色が輝いてとてもすば らしくなる。 わが国の着色画や花鳥や人物の彩色画の筆は、日本の 夏鹿毛や白狸毛で造れば絵具のさばけ具合もよく 色も鮮やかですばらしいものである。 爽</p>	<p>得応、数十年間筆の沿革を考え、その様式を写しみるに、古画 に画筆と書筆の区別はなく、書筆の筆を以て書き、 書筆・画筆の区別は応挙・呉春頃より出でたるもの なり。支那には書筆・画筆の区別なく書筆を以て画 を写すなり。然るに余考えるに、水墨の画、書筆の良 筆にて画かけば墨色りんりんとして至極妙有り。 我國の画、着色画・花鳥人物彩敷画の筆は我 国の夏鹿毛、白狸毛を以て造れば絵具のさばき様よくし てその色鮮やかなる事実に妙あり。 爽</p>	<p>得應数十年間筆の沿革を考其様式を寫みる尔古画 尔画筆と書筆の区別はなく書筆の筆を以画がき 書筆画筆の區別は應挙呉春頃より出多るもの なり支那尔者書筆画筆の區別なく書筆を以画 を写なり然るに余考へる尔水墨の画書筆の良 筆尔て画可けは墨色りんりんとして至極妙有り 我國の画着色画花鳥人物彩敷画の筆は我 国の夏鹿毛白狸毛を以造れ者繪具のさハき様よく志 て其色あだやかなる事実ニ妙あり 鮮 爽</p>

15		
現代語訳	書き下し	翻刻
<p>竹田先生用 〔図〕 竹田の筆 〔図〕 野呂介石先生の筆 〔図〕 横白鷺陸申権製</p> <p>龍爪陸申権製 玉飯金丹陸申権製</p>	<p>書き下し 翻刻に同じ</p>	<p>竹田先生用 〔図〕 竹田用筆 〔図〕 野呂介石先生用筆 〔図〕 横白鷺陸申権製</p> <p>龍爪陸申権製 玉飯金丹陸申権製</p>

16		
現代語訳	書き下し	翻刻
<p>浦上春琴先生の筆 備中国（岡山県西部）の玉嶋正文堂が造る。 夏鹿青味毛を用いる 〔図〕 浦上玉堂先生が愛玩した筆 明筆 この筆を米庵先生に贈る。 〔図〕 梅逸、竹洞先生の筆 夏鹿赤一毛で造る。 〔図〕 古沢製</p> <p>正文堂製</p>	<p>書き下し 浦上春琴先生用筆 備中国玉嶋正文堂造る。夏鹿青味毛用いる。 〔図〕 浦上玉堂先生愛玩筆 明筆 この筆米庵先生に贈る。 〔図〕 梅逸、竹洞先生用筆 夏鹿赤一毛にて造る。 〔図〕 古沢製</p>	<p>翻刻 浦上春琴先生用筆備中国玉嶋正文堂造夏鹿青味毛用ひる 〔図〕 浦上玉堂先生愛玩筆明筆此筆米庵先生贈ル 〔図〕 梅逸竹洞先生用筆夏鹿赤一毛にて造 〔図〕 古澤製</p>

17		
現代語訳	書き下し	翻刻
<p>池大雅先生の筆 〔図〕 大雅堂の書筆 〔図〕</p>	<p>書き下し 翻刻に同じ</p>	<p>翻刻 池大雅先生用筆 〔図〕 大雅堂書筆 〔図〕</p>

19		
現代語訳	書き下し	翻刻
翻刻に同じ	翻刻に同じ	明筆 〔函〕〔函〕〔函〕 李展製 施阿牛製 張天錫製

20		
現代語訳	書き下し	翻刻
書き下しに同じ	〔函〕〔函〕〔函〕 程奕製 嚴永製 張真製	〔函〕〔函〕〔函〕 程奕製 嚴永製 張真製

21		
現代語訳	書き下し	翻刻
不折先生の画筆 〔函〕 先生の画筆は雪舟筆にならったものである。毛は羊毫で極めて柔毛である。 〔函〕〔函〕	不折先生画筆 〔函〕 先生画筆 雪舟筆より出しなり毛羊毫極柔毛なり 〔函〕〔函〕	不折先生画筆 〔函〕 先生画筆雪舟筆より出しなり毛羊毫極柔毛なり 〔函〕〔函〕



22		
現代語訳	書き下し	翻刻
<p>同 下村観山先生の筆 〔図〕 〔図〕 天然剛好</p>	<p>翻刻に同じ</p>	<p>同 下村観山先生用筆 〔図〕 〔図〕 天然剛好</p>

23		
現代語訳	書き下し	翻刻
<p>同 村瀬玉田先生の筆 〔図〕 〔図〕 山馬で造る</p>	<p>同 村瀬玉田先生用筆 〔図〕 〔図〕 山馬にて造る</p>	<p>同 村瀬玉田先生用筆 〔図〕 〔図〕 山馬で造る</p>

25		
現代語訳	書き下し	翻刻
<p>同 同 鈴木松年先生の筆 〔図〕 〔図〕 〔図〕 山馬で造る</p>	<p>同 同 鈴木松年先生用筆 〔図〕 〔図〕 〔図〕 山馬にて造る</p>	<p>同 同 鈴木松年先生用筆 〔図〕 〔図〕 〔図〕 山馬で造る</p>

27		
現代語訳	書き下し	翻刻
<p>同 栖鳳用 竹内栖鳳先生の筆 〔図〕 〔図〕 〔図〕</p> <p>冬鹿真はしりと最上の羊毫で造る。</p>	<p>同 栖鳳用 竹内栖鳳先生用筆 〔図〕 〔図〕 〔図〕</p> <p>冬鹿真はしり最上羊毫を以て造る。</p>	<p>同 栖鳳用 竹内栖鳳先生用筆 〔図〕 〔図〕 〔図〕</p> <p>冬鹿真はしり最上羊毫を以造</p>

29		
現代語訳	書き下し	翻刻
<p>同 同 菊池芳文先生の筆 〔図〕 〔図〕 〔図〕</p>	<p>翻刻に同じ</p>	<p>同 同 菊池芳文先生用筆 〔図〕 〔図〕 〔図〕</p>

31		
現代語訳	書き下し	翻刻
<p>同 玉溪先生の筆 望月玉泉先生の筆 〔図〕 〔図〕 〔図〕</p>	<p>翻刻に同じ</p>	<p>同 玉溪先生用筆 望月玉泉先生用筆 〔図〕 〔図〕 〔図〕</p>

33		
現代語訳	書き下し	翻刻
<p>同 同 都路華香先生の筆 〔図〕 〔図〕 〔図〕</p>	<p>翻刻に同じ</p>	<p>同 同 都路華香先生用筆 〔図〕 〔図〕 〔図〕</p>

35		
現代語訳	書き下し	翻刻
<p>同 谷口香嶠先生の筆 〔図〕 同 白狸飛、青味夏毛、冬鹿真はしり、羊毫を合す。 〔図〕 同 最上の羊毫とアイスケンの尾毛を使う。 〔図〕</p>	<p>同 谷口香嶠先生用筆 〔図〕 同 白狸飛、青味夏毛、冬鹿真はしり、羊毫合す。 〔図〕 同 最上羊毫、アイスケン尾毛用いる。 〔図〕</p>	<p>同 谷口香嶠先生用筆 〔図〕 同 白狸飛青味夏毛冬鹿真はしり羊毫合す 〔図〕 同 最上羊毫アイスケン尾毛用ひる 〔図〕</p>

37		
現代語訳	書き下し	翻刻
<p>同 上村松園女史の筆 〔図〕 同 松園女史 〔図〕</p>	<p>同 上村松園女史用筆 〔図〕 同 松園女史 〔図〕</p>	<p>同 上邨松園女史用筆 〔図〕 同 松園女史 〔図〕</p>

39		
現代語訳	書き下し	翻刻
<p>同 山元春挙先生の筆 〔図〕 同 〔図〕</p>	<p>翻刻に同じ</p>	<p>同 山元春挙先生用筆 〔図〕 同 〔図〕</p>

41		
現代語訳	書き下し	翻刻
<p>同 同 今尾景年先生の筆                  (図) (図) (図)</p> <p>山馬の毛で造る。</p>	<p>同 同 今尾景年先生用筆                  (図) (図) (図)</p> <p>山馬の毛にて造る。</p>	<p>同 同 今尾景年先生用筆山馬の毛で造る                  (図) (図) (図)</p>

43		
現代語訳	書き下し	翻刻
<p>同 同 木嶋櫻谷先生の筆                  (図) (図) (図)</p>	<p>同 同 木嶋櫻谷先生用筆                  (図) (図) (図)</p>	<p>同 同 木嶋櫻谷先生用筆                  (図) (図) (図)</p>

#### IV. 記載情報のまとめ

##### 1. 獣毛別にみる画家の筆

『筆譜』1冊目2頁によると、我が国における絵筆の毛は兔、狐、鼬、貂、白狸、夏鹿、冬鹿が重用されたと記されている。では、各作家の名前が付された筆はどのような仕様とされていたか。以下に

示す表1から表6では、作家名と筆の仕様が記された内容を獣毛ごとにまとめた。

なお、表の作成にあたっては初出が早い順に掲載した。そして、流派や師弟等のため同じ筆を用いたと記されていた画家たちは同一区画にまとめた。また、原文で姓または名のみであった場合は師弟関係等から推定される作家名を記載した。

表1 鹿毛

	作家名	原文表記	生没年	部位	詳細	特徴	掲載
1	狩野正信	狩野正信	1434-1530	夏毛	赤一	記載なし	1-2
	狩野元信	狩野元信	1476-1559				
	狩野永徳	永徳	1543-1590				
2	谷文晁	文晁翁 文晁	1763-1840	雄鹿 首毛	記載なし	銘「千変万化」 筆の毛が割れる。	1-8
3	狩野探幽	探幽	1602-1674	夏毛 冬毛	記載なし	毛の選択で剛さと柔らかさを兼ね合わせる。	1-9
4	岡田半江	半江	1782-		記載なし	記載なし	1-13 2-13
		岡田半江	1846				
5	山本梅逸	梅逸	1783-		記載なし	記載なし	1-13
			1856		赤一	古澤製	2-16

	中林竹洞	竹洞	1776- 1853	夏毛	記載なし	応挙用 丸山流の夏鹿毛筆	1-14
	金子金陵	金陵	不明 - 1817				
	大西圭斎	圭斎	1773- 1829				
	岡本秋暉	秋暉	1807- 1862				
	浦上春琴	春琴 浦上春琴	1779- 1846				
6	渡辺華山	渡辺華山 華山	1793- 1841	夏毛	記載なし	備中国（岡山県）玉嶋正文堂製	2-16
高久靄厓	靄厓 高久靄厓	1796- 1843					
高隆古	隆古	1810- 1858					
7	椿椿山	椿山	1801- 1854	夏毛	記載なし	竹描き筆 長崎の知人を介して上海へ注文 剛毛は十分に水に浸す 渡辺華山の竹描き筆を用いる	1-14 2-10
	渡辺小華	渡辺小華 小華	1835- 1887				
	野口幽谷	野口幽谷	1827- 1898				
	渡辺華石	華石	1852- 1930				
8	椿椿山	椿山	1801- 1854	夏毛	青味	筆管は黄色か赤色 小軸付きの筆	1-15 2-11 2-12
渡辺小華	渡辺小華 小華	1835- 1887	記載なし		椿山と同じ筆	1-15 2-11	
野口幽谷	野口幽谷	1827- 1898					
渡辺華石	華石	1852- 1930				1-15	
8	日根対山	對山	1813- 1869	記載なし	記載なし	記載なし	1-17 2-11
9	田崎草雲	田崎草雲	1815- 1898	夏毛	記載なし	記載なし	1-18 2-10

表 2 山馬

	作家名	原文表記	生没年	部位	詳細	特徴	掲載
1	雪舟等楊	雪舟	1420- 1506 頃	記載なし	記載なし	根竹の皮で巻き、麻糸で縛る。	1-7
2	邨瀬玉田	邨瀬玉田	1852- 1917	記載なし	記載なし	記載なし	2-23
3	鈴木松年	鈴木松年	1848- 1918	記載なし	記載なし	記載なし	2-25
4	今尾景年	今尾景年	1845- 1924	記載なし	記載なし	記載なし	2-41

表 3 馬

	作家名	原文表記	生没年	部位	詳細	特徴	掲載
1	瀧和亭	瀧和亭 和亭	1832- 1901	尾脇	極細毛	大院品 中院品 小院品	1-17 2-7

表 4 羊

	作家名	原文表記	生没年	部位	詳細	特徴	掲載
1	奥原晴湖	奥原晴湖 晴湖	1837- 1912	記載なし	羊毫	記載なし	1-18 2-2
2	山田介堂	山田介堂	1869-	記載	羊毫細口	頭は一寸二分（約 4.5 cm）	2-3

			1924	なし		径は三分（約 1.1 cm）	
3	中村不折	不折	1866- 1943	記 載 なし	極めて柔らかな羊毫	雪舟筆から展開した筆	2-21

表 5 兼毫

	作家名	原文表記	生没年	動物	部位や詳細	特徴	掲載
1	尾形光琳	光琳	1658- 1716	鹿 羊	鹿真はしり 羊毫の強い毛	付け立て筆	1-3
	酒井抱一	抱一	1761- 1828				
2	与謝蕪村	蕪村	1716- 1784		冬鹿真はしり 羊毫	記載なし	1-10
3	松村呉春	呉春	1752- 1811		冬鹿白真のはしり毛 唐筆の羊毫	記載なし	2-13
4	竹内栖鳳	竹内栖鳳 栖鳳	1864- 1942		冬鹿真はしり 最上羊毫	記載なし	2-27
5	谷口香嶠	谷口香嶠	1864- 1915	白狸 鹿  羊  羊 アイスケン	白狸飛 青味夏毛 冬鹿真はしり毛 羊毫  最上羊毫 アイスケン尾毛	記載なし	2-35

表 6 鳥, その他

	作家名	原文表記	生没年	動物	詳細	特徴	掲載
1	雪舟等楊 (再掲)	雪舟	1420-1506 頃	水鳥	銘「羽墨」	小羽を使った 刷毛・筆	1-7
2	田能村直入	田能邨直入 直入	1814-1907	不明	晩年用 髭筆	得應軒製	2-9

以上、『筆譜』において各作家に併記された獣毛は、単独では鹿、山馬、馬、羊であった。そして、兼毫では鹿と羊、白狸と鹿と羊、羊と「アイスケン」があった。その中で、2 冊目 35 頁の谷口香嶠の項目に記された「白狸飛」と「アイスケン」は、筆者の調査では詳細が不明であり今後の課題として残す。その他、表 6 で示したように水鳥や髭といった特殊な毛が記載されていた。

## 2. 仕様が記されていない作家

次に、獣毛などの仕様が記されず、図と作家名、その他筆の銘などが掲載された群を備考とともに表 7 でまとめた。表 7 における掲載の条件は表 1 から表 6 と同じである。

表 7 詳細な仕様の表記が無い作家

	作家名	原文表記	生没年	備考	掲載
1	池大雅	大雅 池大雅 大雅堂	1723-1776		1-10 2-17
2	円山応挙	応挙	1733-1795		1-11
3	松村呉春 (再掲)	呉春	1752-1811	1-12 頁 2 本目の筆が景文と同じ	1-11 1-12
4	松村景文	景文	1779-1843	1-12 頁 2 本目の筆が呉春と同じ	1-12
5	田能村竹田	竹田	1777-1835	龍爪陸申権製 玉飯金丹陸申権製 唐筆 野呂介石も用いる	1-13 2-15

6	野呂介石	野呂介石	1747-1828	横白鷺陸申権製	
7	岸連山 岸竹堂	岸連山 岸竹堂	1804-1859 1826-1897	同じ筆	1-16
8	三浦梧門 木下逸雲 帆足杏雨	梧門 逸雲 杏雨	1808-1860 1800-1866 1810-1884	支那製 銘「鷺」 横白鷺	1-16 2-1
9	鉄翁祖門	鉄翁上人 鉄翁	1791-1872	支那筆 雙料寫奏	1-16 2-1
10	田能村直入 (再掲)	田能邨直入 直入	1814-1907	前書き用 中国の筆 玉飯金丹 中年用 得應軒製 亘南画	1-18 2-9
11	橋本青江	橋本青江	1821-1898		2-1
12	跡見華溪	跡見華溪	1840-1926		2-2
13	武村香靄	武村香靄	1852-1915	香蘭得應軒製	2-2
14	細谷立斎	細谷立斎 立斎	1831-1911		2-3
15	河辺青蘭	河辺青蘭	1868-1931		2-4
16	田近竹邨	竹邨	1864-1922		2-4
17	森金石	森金石	1843-1921		2-4
18	野口小蘋	野口小蘋	1847-1917		2-5
19	藤堂凌雲 大場学仙	藤堂凌雲 大場学仙	1809-1886 1820-1899	同じ筆	2-10
20	中西耕石	耕石	1807-1884	對山と同じ筆	2-11
21	立原杏所	立原杏所	1785-1840		2-12
22	谷文一	谷文一	1787-1818		2-12
23	浦上玉堂	浦上玉堂	1745-1820	愛玩の筆 明筆 市河米庵に明筆を送る	2-16
24	下村觀山	下村觀山	1873-1930	天然剛好	2-22
25	菊地芳文	菊地芳文	1862-1918		2-29
26	望月玉泉	望月玉泉	1834-1913		2-31
27	望月玉溪	玉溪	1874-1938		2-31
28	都路華香	都路華香	1871-1931		2-33
29	上村松園	上邨松園 松園	1875-1949		2-37
30	山元春挙	山元春挙	1872-1933		2-39
31	木嶋櫻谷	木嶋櫻谷	1877-1938		2-43

### 3. その他

『筆譜』では、技法や発墨の向上、絵具の操作において適切な獣毛、琳派の描法に適する毛の情報、

各時代の大家が用いた筆や特殊な筆の特徴が記載されている。これらを以下の表8でまとめた。

表8 技法・流派・特殊筆

	技法や流派、画家の名前等	毛の情報	筆の特徴	掲載
技法	金泥地紋描き	日本の鼠毛	記載なし	1-2
	胡粉描き筆 得応軒慶明筆	記載なし	得応軒慶明筆	1-3
	金泥描き筆 得応軒慶明筆	記載なし	得応軒慶明筆	1-3
	彩色	夏鹿青味 短い所白真	記載なし	1-4
		夏鹿毛・白狸	花鳥や人物の彩色画において絵具のさばけと発色が良い	2-14
	人物十八描法 または 十九描法	記載なし	・戦筆水紋描 蘭葉描 ・減筆描 枯柴描 竹笹描 擲頭釘描 ・橄欖描 折蘆描 棗核描 ・鉄線描 釘頭鼠尾描 馬蝗描 混描	1-5 1-6

			・曹衣描 柳葉描 蚯蚓描 行雲流水描 高古遊 絲描 琴絃描	
	水墨画	記載なし	良質の書筆で描くと墨色がとてもよくなる。	2-14
流派	琳派様式での 金泥, 胡粉用筆	極めて強い毛	さばけがよい	1-3
各時代の 傾向	周文, 秋月, 啓書記, 能阿弥, 芸 阿弥, 相阿弥, 明兆などの室 町時代前後の画家	記載なし	山水, 人物, 花鳥を描く筆は古代の画筆と称する筆	1-2
	岡本秋暉をはじめとした天明 ・寛政・文化・文政・天 保期の大家の筆	夏鹿毛 赤一 青味	円山派の筆 応挙の筆師、古沢が造る円山派の筆から発展した もの	1-14 2-13
	明治の大家の筆	冬鹿白真の はしり毛 唐筆の羊毫	四条派呉春用筆も同じ	2-13
特殊筆	谷文晁 「梅花筆」	記載なし	小筆の頭を5つ合わせて軸に入れる。 葛飾北斎も使う	1-8

表 8 のうち、服の皺の描き方をまとめた人物十八描法や十九描法は、中国絵画において形式化された毛筆技法（谷・野間（1952））を源流としている。それ以外の彩色や描画技法に関する記載からは発色や絵具の操作性に重点が置かれていたとわかる。また、室町時代の画家が使っていたとする「古代の筆」は仕様が記載されていないものの、1冊目1頁を参照すると土佐派の画家が用いた筆と読み取れる。

## V. おわりに

明治期から大正期にかけての日本画は、現代でも用いられる用具・用材の開発が作家と職人の相互関係によって模索された時代であった。その中で、宮内家は日本画家と絵筆の関係を明らかにしていくにあたって現代まで重要な位置にありつつも、関連する研究や資料が少なかった。この点に端を発し、本稿はこれまで全容が明らかでなかった『筆譜』を翻訳し記載内容を整理した。

本研究から、『筆譜』には日本画家の絵筆の仕様のみならず、中国や室町時代、江戸時代をも範疇にした製筆と筆法に関する情報があるとわかった。そこからは、宮内家の絵筆づくりが中国の筆文化を受容してきた我が国の実態を踏まえた取り組みであったとわかる。このような内容を記した『筆譜』は、冒頭で示した本課題の進展に資する重要な資料であることは疑いない。一方で、『筆譜』の内容は尾崎が『筆工製法心得』へ指摘すると同様に、作家が使用していた実態や来歴に関する検証に限界がある。よって、本稿で示した結果はあくまで『筆譜』の内容を詳らかにしたものであり、各作家が使用した筆

の種類や仕様、ひいては画法や制作法等を同定しない。

今後は、『筆工製法心得』との照合や絵筆職人への聞き取りを通して「白狸飛」や「アイスケン尾毛」といった本稿で読解の精度が保証できなかった語句や文のゆらぎを検証し、翻訳の精度を向上したい。

### 謝辞

本稿執筆にあたって資料提供と聞き取りを快諾いただきました谷中得應軒宮内由紀子氏に御礼申し上げます。

### 付記

本研究の一部は JSPS 科学研究費 21K12906 の助成によるものである。

### 注

- 1 本稿における谷中得應軒や宮内大助の情報は、宮内由紀子氏への谷中得應軒店内での聞き取り（2022年2月28日）と電話インタビュー（2022年12月26日）によるものである。また、本研究では『筆譜』の実物を実見した後、宮内由紀子氏から『筆譜』の複写物を提供いただいた。資料1の各図は谷中得應軒提供の複写物を掲載している。
- 2 尾崎重春(2013)『筆聖 宮内得應 筆巡りの旅』青月社, pp. 62-63

### 文献

- 鹽田力蔵（1942）『東洋絵具考』アトリエ社, p. 183  
 谷信一・野間清六 編（1952）『日本美術辞典』東京堂出版 p. 525  
 神田喜一郎（1975）木村陽山『筆』大学堂書店, p. 1



木村陽山 (1975) 前掲書, p. 3

林功・箱崎睦昌 (1994) 『人気作家に学ぶ日本画の技法②  
画材と技法』同朋舎出版, p. 53

尾崎重春 (2013) 『筆聖 宮内得應 筆巡りの旅』青月社

宮廻正明・荒井経・鴈野佳世子 編・著 (2014) 『日本画  
名作から読み解く技法の謎』東京藝術大学大学院保存

修復日本画研究室 監修, 世界文化社, p. 30

#### 図版典拠

資料 1 画像は谷中得應軒提供の複写物

資料 2 筆者作成

表 1-表 8 筆者作成